

渡嶋再考

小口雅史

Review of Watarinoshima

はじめに

- ① 原「渡嶋」北海道「説
- ② 「渡嶋」本州北部総称「説の登場とその展開
- ③ 渡嶋」北海道説の反論と論争の展開
- ④ 渡嶋」本州北部総称説の終焉
- ⑤ 新北海道説の台頭
- ⑥ 津軽海峡を挟む世界と渡嶋
おわりに

【論文要旨】

斉明紀に見える「渡嶋」が具体的にどの地域を指すのかという問題の解明は、日本古代国家における一大転機であった大化改新後の初期律令国家の形成過程や、当時の国際関係を考える上できわめて重要な問題であって、早く江戸時代から学者の注目を集めてきた。

古くは津軽の北は北海道であるという単純な理解から、渡嶋」北海道説が流布していたが、その後、津田左右吉等によって『日本書紀』のいわゆる「比羅夫北征記事」の厳密な読解が試みられるようになり、史料の解釈から渡嶋を本州北部の内におさめる見解が有力となっていく、戦後の通説的位置を永く占めてきた。

しかし近年の北海道考古学の急速な進展にともなって本州と北海道との間の豊かな交流が明らかになるにつれて、比羅夫は当然北海道へ渡ったであろうという共通認識が形成され、津軽の北は当然北海道であるという渡嶋」北海道説が復活し、現在ではこれが通説となったと言つてよい。

しかし中世以前における「津軽」は、現在の津軽地方の南部のみを指す語であり、半島海岸部はむしろ道南地域と密接な関わりを持つ世界であった。またそうした津軽海峡を挟む世界は、道央部あるいは道東・道北部とはやはり違った世界である。こうしたことを考えるとき、津軽の北に位置するという渡嶋はこの海峡を挟む世界に相当するのではないかと思われる。

そのさらに北には「肅慎」の世界が存在したのであるが、それこそ道央部や道東・道北部といった、本州側からはよりいっそう未知の世界であったのではないか。「肅慎」の風俗習慣などについての多様な史料の在り方は、「肅慎」自体のもつ複合的な民族要素によっているものと思われる。

この津軽海峡を挟む世界は、一〇世紀頃にいったん消滅し、それが渡嶋という用語の消滅の背景となるが、まもなく復活し、中世においては、津軽海峡を「内海」とする、海峡の南北一体の世界がまた形成されていったと考えられる。

はじめに

斉明朝の阿倍比羅夫による北方航海は、大化の改新後の初期律令国家形成過程ないし国際関係において、重要な意義を有していることはもちろんのこと、近年ようやくその研究領域が本格的に開拓されてきた、いわゆる（日本）北方史の実態究明にとっても、文献史学の側から積極的に踏み込める主要な論題である。

『日本書紀』（斉明紀）には、それに関連して、当時の当該地域のものであり、その現地比定は、比羅夫の活動や、それに関わる北方世界の人々の行動を知るための重要な作業の一つである。

それらの地名のなかでもっとも注目される「渡嶋」をはじめ、いくつかの地名については、私もかつていささか論じたことがあるが⁽¹⁾、その後の斯界の研究の流れからみると、当時の私の理解（渡嶋＝津軽海峡を挟む世界説）はすでに過去のものとなり、現在では「渡嶋」の現地比定については、それを北海道とみることではほぼ見解が一致し、その点についてはもはや議論の対象とすらなくなってきたという⁽²⁾。

たしかに近年の、この時代に関する北海道考古学のめざましい進展とその成果によって、渡嶋＝北海道説は、ほぼ通説化したと言つてよい状況である。その背景には、後に検討するように、本州と北海道との間の密接な交流関係が相当に解明されてきたことがある。

しかしながらまだ論じ残された点は多く、渡嶋＝北海道説についても、詳細にみれば論者によって微妙な違いがあり、なお解決しなければならぬいくつかの重要な問題点も残されている。とくに私が旧稿で提起した「津軽海峡を挟む世界」という観点は、この時代の北海道をどう地域区分してその歴史を考えるべきかという重要な問題とも密接に関わって

おり、本稿ではなおいくつかの論点を提示したいと思う。確かに本州と北海道との密接な交流は、もはや、われわれのかつての常識をはるかに越える、壮大なスケールを持つものであったことは否定しがたいとしても、そのことからただちに渡嶋を単に「北海道」とのみ断定することには、いささか問題があるように思われるのである。

また近年の北海道史研究では、この斉明朝は、続縄文文化の終末段階から擦文文化の成立期への移行期であると考えられている。擦文文化は本州文化の影響下で道央を中心に成立したものである。渡嶋問題はこの点とも不可分の関係を有している。そこでは「渡嶋蝦夷」は「擦文集団」と理解されているようなので、私の言う「海峡を挟む世界」との関係が問題となる。この点についても、本稿ではなお若干の論点を提示したい。

さらに、本稿では深入りする余裕はないが、この渡嶋問題は、そのさらに北方の世界と関わる肅慎の実体をどう理解するのかというダイナミックな問題に、当然のことながらつながっていく。本稿でも、ある程度の見通しは立ててみたい。

本稿では、こうした問題意識に立った上で、旧稿でも行つてはいるが、既往の渡嶋問題に関する研究を再度整理しながら、私見を提示していきたいと思う。もちろん当時の地理認識のレベルから考えて、渡嶋の意味する地域を正確に現在のそれと比較することは無意味である。比羅夫が厳密にどこまで行つたのかは、本質的な問題ではないという考え方もあろう。それは『日本書紀』が、比羅夫関係の記事を集中的に掲載している⁽³⁾、他の類似の事例が伝えられることがなかったということとも関わる。ただ当時の人々の北方世界の認識のなかで、おおよそどのあたりを觀念していたのか、現時点での論点の整理は不可欠であろう。

① 原「渡嶋」北海道」説

斉明紀にみえる阿倍比羅夫による蝦夷・肅慎征討記事は、その対象が、ついに古代国家の国郡制に組み込まれることのなかった津軽以北の地であることから、早く江戸時代から注目を集め、その具体的な現地比定をめぐって議論の対象となっていた。

この分野での研究の嚆矢と目されるのは新井白石「1」であるが、ここで渡嶋が北海道（蝦夷地）に比定されると、この説は後々まで大きな影響を及ぼすこととなった。北方探検家として著名な松浦武四郎も、北海道の地名選定に当たって、白石の説を主要な根拠としている。学問的には新井白石とは対極的な位置を占める本居宣長「3」も、渡嶋については北海道説をとっているし、こうした北海道説は、明治になっても、細かい点では差があつて若干の批判的な論点が出されたものの、基本的には維持されていった。明治から大正にかけての飯田武郷「5」・沼田頼輔「6」・吉田東伍「7」・9・白鳥庫吉「10」・河野常吉「12」・鳥居龍藏「13」・喜田貞吉「16」17」といった諸大家の研究は、いずれも北海道説である。

もともと「寛政三奇人」の一人として著名な林子平「2」だけは、北海道説に懐疑的で、後方羊蹄の解釈をめぐって、比羅夫の訪問地は津軽あたりであろうと述べている。⁽⁵⁾

ただこうした初期の北海道説は、古代の蝦夷をそのままアイヌとみなし、また津軽から海を渡らなければ辿り着けない場所ということで、単純に渡嶋を北海道と解するもので、それ以上の積極的な根拠は有していない。というよりも、これ以上の根拠は必要としない自明なこととして理解され続けたのである。⁽⁷⁾ もちろん、現在の学問水準では、このままでは北海道説を支持するわけにはいかないことは言うまでもない。

② 「渡嶋」本州北部総称」説の登場とその展開

新井白石の研究以来、常識となっていた渡嶋＝北海道説に対して、はじめて『日本書紀』以下の諸史料記事の本格的な史料批判に基づいて反論をなし、渡嶋を本州の内にて理解しようとしたのが、津田左右吉「14」である。津田は以下のような論点を提示した。⁽⁹⁾

① 渡嶋の語義は、「陸路によつて交通往復することができず海を渡って行くところといふ意味」で、日本人による命名である。

「根拠」「シマ」という邦語は必ずしも海水の圍繞している土地をさすに限らないことは、神代紀の「越のしま」、万葉集卷三の「倭しま」から知られる（二六八頁以下）。

② 渡嶋は、鰐田・淳代・津軽といった諸集落の総称である。

「根拠」斉明四年紀「史料1」では、「大饗而帰」とあつて、鰐田・淳代・津軽などの遠征の終了の結果として有間浜で大饗が行われた。

その大饗に参加した渡嶋蝦夷が、それら鰐田・淳代・津軽とは別の集落というのは不自然。斉明五年紀も同様の構文となっている。

また養老四年紀「史料5」は「渡嶋の津軽の津の司」と読めるから、渡嶋に津軽が含まれることがわかる（二六八頁）。

③ 陸路の整備によつて渡嶋の範囲は次第に奥の方へ狭められていった。「根拠」①のような字義からすれば、出羽櫛が秋田に移された時点で、渡嶋が秋田地域を含まなくなるのは当然で、また宝龜二年六月紀に

「出羽国賊地野代湊」とあるから、能代が既に出羽国辺境に含まれていることも知られ、この時点では津軽以北を指すことがわかる。

元慶紀「史料10」12で津軽と渡嶋が併記されるのは、元慶の乱に際して、叛徒に一部が加担した出羽に近い南方の集落＝津軽と、叛乱に関係の無かった北方の集落＝渡嶋とを区別したものである。渡嶋

同様、津軽の名にも広狭があることは、斉明紀で知られる(二八五頁以下)。

右の論点のうち、①については、現在に至るまで継承されているものである。シマにそうした字義があることは、津田が挙げた以外にも多数の事例がある¹¹⁾。津軽半島では、つい先年、竜泊ラインが開通するまで、小泊から竜飛岬にかけては道路がなかった。また津軽海峡を、アイヌが「しょっぱい川」と呼んでいたことは周知の事実であり、その意味では北海道は孤立したシマではないともいえる。ただ②③については、一見しても明らかのように史料解釈に深く関わるものであり、後に詳しくふれるように、激しい議論の対象となっていた。

それでもこの「渡嶋」は本州北部総称¹²⁾説は、後に田名網宏「20 24 28」・村尾次郎「22」・坂本太郎「23」・高橋富雄「30」・直木孝次郎「31」・井上光貞「39」・松原弘宣「45」等の多くの研究者に、基本的には襲われていき、その後、近年まで、旧来の「渡嶋」は北海道¹³⁾説に代わって通説的位置を占めることとなった。

それらのうち、田名網説については、次章で論争史のなかで詳論するので、それ以外の諸説について、津田説とは異なる点についてここでふれておく。

村尾次郎は、ワタリとは、大和の人がエミスの地に進入する直前の地を指し(阿武隈川南岸地域を亘理と呼ぶのも同義)、日本海側を北航すれば好目標である男鹿が、本来の渡嶋であるとする。ただしこうした特定の場所の名称である渡嶋が、「越の渡嶋」「渡嶋の津軽」というように藤原京時代に広範囲に用いられるようになり、雄物川・米代川・岩木川の流域地帯はすべて渡嶋と汎称されるようになったという。児玉作左衛門「34」が指摘するように、この解釈は夷地である限り渡嶋の場所は変化しないことになるので、津田説③とはやや趣が異なるといえよう。

直木孝次郎は、啓蒙書中で論じているということもあって明確にその根拠は示していないが、一度に北海道に行くのは危険だという自らの体験に基づいて、津田説を支持している。斉明四年紀「史料1」の有間浜は鰐田近くで、渡嶋は津軽半島。津軽は現在の地名よりも南の、鰐田に近い部分を指すという。渡嶋の字義は津田説①に従うが、②③については、右記のように固有名詞的にとらえ、総称であるとか地域の変化があるとかについては触れていない。

井上光貞は、津田説をほぼそのまま継承している。ただ斉明紀の史料批判については、後に触れるように、熊谷公男「53」の解釈の基礎となるもので注目される。

松原弘宣は、斉明四年紀「史料1」について、恩荷を鰐田・淳代の郡領に任命したものと解し、¹⁴⁾それを受けての有間浜での饗宴であるから、そこに参集した渡嶋蝦夷とは、鰐田・淳代の蝦夷を指すとするのがもつとも自然な史料の読みであるとする。この解釈に立てば、当然のことながら渡嶋は鰐田・淳代地域の総称ということになる。

また斉明六年紀「史料2」には、渡嶋蝦夷が大河を南に渡ってきて比羅夫軍に合流しているとあるから、これは肅慎軍が南下してきていると理解すべきで、この大河は米代川と考える。このことから渡嶋は鰐田・淳代だと言う。

また持統十年紀「史料3」もそうした特定の地域を指す固有名詞と解して問題なく、養老・宝龜の記事「史料4」も同じく秋田・能代地域とみて問題ないと言いい、元慶紀・保則伝「史料10」からみても津田の言うような本州北部の総称説はなりたたず(この論点については本稿でも後に詳述する)、秋田・能代地域を指す固有名詞と見るべきであるとしている。

北方史研究が進展した現時点では、こうした渡嶋を本州北部の内におさめようとする説については、様々な問題があるが、それについては次

章以下で詳しく述べることにする。

③ 渡嶋Ⅱ北海道説の反論と論争の展開

大正末年から昭和初年にかけて発表された津田説は、それまでの「渡嶋」理解についての常識を覆す新説であったが、すぐに活発な議論を惹起するには至らなかった。

しかし昭和二十八年になって、北海道説に立つ瀧川政次郎「19」と、基本的に津田説を支持する田名網宏「20」とが、ほぼ同時に論文を発表すると、ようやく渡嶋の現地比定をめぐって本格的な論争が展開されるようになっていった。続く田名網「24・28」・瀧川「27」とあわせて、まず両者の論点を対比的に示してみる。

瀧川説の要点は以下のようなものである。

① 有間浜は十三湊である。

〔根拠〕 斉明四年紀「史料1」の征行では津軽・淳代二郡の郡領を定めたのだから、それにとりまなう饗宴の場である有間浜は、津軽・淳代二郡のうちである。有間浜へは船団が進むわけであるが、津軽・淳代のうちで百八〇艘もの兵船を停泊できる湊は十三湊以外にない（19・30頁）。斉明五年紀の「一所」は同じく有間浜Ⅱ十三湊と解すべきである（27・六九頁。深浦・鯨ヶ沢などは規模からみて失格である）。有間浜の音は私郡江流末に近いが、その江流末郡は十三湊地域を含むものである。

② 十三湊から出帆して北に進めば船は自ずと北海道へ着くので、渡嶋は北海道である。

〔根拠〕 十三湊から潮流をはずれて青森湾にはいるのは困難だが、積丹半島の神威岬など北海道西海岸に行くのは容易である。日本語シマは必ずしも水で囲まれた陸地を意味しないが、「渡嶋」という以

上は、船で渡らなければ行けない陸地の意である（27・六八頁）。

③ 渡嶋は出羽とは陸続きではない。

〔根拠〕 持統十年三月紀「史料3」の解釈：「越度嶋蝦夷」は、「越の蝦夷及び度嶋の蝦夷」とも「越の国に属する度嶋の蝦夷」とも解せられるが、仮に後者でも越と渡嶋とが陸続きであることを意味しない（たとえば伊豆大島であっても伊豆と大島は陸続きではない）¹⁵。

養老二年八月紀「史料4」の解釈：出羽并渡嶋蝦夷と「并」字があるのだから、出羽と渡嶋が別の島である証拠にはなっても、出羽と渡嶋が陸続きであることの証拠にはならない。

養老四年正月紀「史料5」の解釈：「渡嶋の津軽」と、津軽を渡嶋のなかに含む読み方をするべきではない。「渡嶋と津軽の津司」と解すべきであって、これは北海道と津軽を往復する船の発着港の監察官司である。

なぜなら津軽は地方名で港名ではない。だから渡嶋の津軽港の津司という訓みはありえない。

宝龜十一年五月紀「史料6。伊治公嵯麻呂の乱」の解釈：渡嶋蝦夷が呼応したことに対して出羽国に慰諭させたというだけでは、渡嶋と出羽国が陸続きであるとはいえない（たとえば、瀬戸内海に海賊に、四国九州の海賊が呼応することがある）。（以上、27・六八頁以下）

④ 後方羊蹄は余市である。

〔根拠〕 斉明五年紀にみえる、政所を置いたという「後方羊蹄」を『日本書紀』が「斯梨蔽之」と訓むのは疑問で、「シリバのヨウテイ」と訓むべきもの（19・三三頁以下）。シリバ山が余市にあり、余市の旧名はイオチである。比羅夫はそれをヨウテイと聞き誤って羊蹄の字をあてた。余市は気候も地形もよく、天産も豊かで、政所を置くにふさわしい。余市神社の立地も後世の郡衙の立地にふさわしいところである。斉明六年紀「史料2」の大河は余市川。弊路弁嶋

は余市付近の古平である。古平港に面する海岸を掘ると葭の根が大量に出土するが、地形的にみてもここはかつて島であった。またヘロベはアイヌ語で鯡を意味するが、古平沖合は有名な鯡の漁場である。

⑤「比羅夫北征」の一般的評価

戦前の国史家の日本に対する過大評価への反動で、戦後の日本史家が日本を過小評価している。比羅夫が北海道へ行くことなど驚くことではない。

一方、田名網「20」は、まず、明解な津田説にもかかわらずなお渡嶋北海道説が根強く行われていることは遺憾であると批判し、次のような論点を加えた。

①北海道説があるのは、中世以降（とくに近世以降）、渡嶋の指す地域が変化し北海道になったことによる先入観の影響である。

〔根拠〕津田の言うように船で行くのが渡嶋であり、本州北部は、征服後は陸路が可能になったので渡嶋の名にふさわしくなくなり、かつて渡嶋であったことが忘れられてしまったのである。¹⁶

さらにつづく田名網「24」で、今度は具体的な史料に基づいてさらに議論を展開し、宝亀十一年五月紀「史料6」・弘仁元年十月紀「史料8」・元慶紀「史料10 12 13」にみえる渡嶋は、すべて出羽国との密接な関係を示しており、とくに元慶紀は、渡嶋が秋田城からそれほど遠くないことを示しているから、

②渡嶋は出羽国に近接した密接な関係にあることは明らかであって、それを北海道とは解しがたい。

とした。この点については、瀧川「27」の反論を受けた田名網「28」でさらに詳細に論じられている。

〔根拠〕瀧川説②のように、「渡嶋」という以上は、船で渡らなければ行けない陸地の意であるというのならば、齋田・淳代・津軽方面はまさにそれであって自説への批判にはならない。この地へ陸路が通じるのは八世紀まで待たなければならない。また瀧川説③については、以下のように考える。

持統十年三月紀「史料3」の解釈：これは「越の国から渡っていける島の意」で問題ない。¹⁷

養老二年八月紀「史料4」の解釈：陸続きであるかどうかは問題ではなく、船で行くところが渡嶋である。それが北海道である必要はない。「并」は（渡嶋を含む）津軽が出羽国ではなかったから。北海道と出羽の蝦夷が一緒に馬を貢上するというのもおかしい。

養老四年正月紀「史料5」の解釈：津田説以来、素直に読めば「渡嶋の津軽の津司」。津軽のなかの港という意味であって、津軽津という固有名詞だとは言っていない。

宝亀十一年五月紀「史料6。伊治公昔麻呂の乱」の解釈：伊治の蝦夷に北海道蝦夷が呼応するとは常識的に考えられない。海賊の例示は不適切である。秋田辺の蝦夷だから出羽国が急いで慰撫し賜饗したのである。当時は奥羽の中部にしか中央の勢力は及んでおらず（比羅夫の場合は特殊事情）、北海道が問題になるとは考えられない。

また瀧川説①については一次のような反論がなされた。

③有間浜は齋田の浦の近辺である。

〔根拠〕斉明四年紀「史料1」の有間浜と、斉明五年紀の「一所」について、瀧川は同一視している。たしかに斉明四年紀と同五年紀が同事重出ならば有間浜「一所」である。しかし同事重出記事でなければ、両者は別でもよく、必ずしも「一所」を有間浜としなくてよい。有間浜「十三湊は推定としてはあり得るが、しかし他の可能性も否

定できない。斉明四年紀「史料1」の書き方だと、「遂於有間浜」とあるから、「いよいよ最後に有間浜で大饗した」ということであり、鰯田の浦から少し離れたところを有間浜と解すべきで、深浦あたりでも可能性はある¹⁸。また船は鰯田の浦に入ったが、有間浜はそこから陸路を進んだ大饗の地であって、船が停泊するところとみる必要はない。瀧川が有間浜に良港という条件を当てはめて十三湊に比定したが、そうした条件で有間浜を探す必要はない。また仮に有間浜まで船で行ったとしても軍事行動の場合には最適の場所を使うとは限らず、臨機応変に次善の策をとることもよくある。

また瀧川説④⑤については、次のように述べる。

④後方羊蹄は本州北部である。

〔根拠〕瀧川も別なところで論じているように、『日本書紀』の記事は基本的に信用できる。この訓についても、『日本書紀』の記述のまま採るべきであって、瀧川のように「シリバのヨウテイ」と分割して訓むべきではない。文脈から見ても有間浜・肉入籠・後方羊蹄は相互に近くのはずで、北海道とは解しがたい。

⑤「比羅夫北征」の一般的評価：奥羽南部にまだ未征服のところがあ
るのに、それでも津軽まで行ったことを評価すべきだ。これでも大
事業である。

この両者の論争については、直後に虎尾俊哉「29」による寸評がなされている。そこでは両説の違いのポイントが、斉明四年紀「史料1」の「遂於有間浜」の「遂」の解釈にあると指摘し、瀧川は「秋田・能代より進撃して遂に有間浜に至った」と解するが、しかし田名網の言うようにそれが唯一の解釈ではない。「いよいよ最後に」の意味にもとること
ができ、秋田・能代方面での軍事行動の内とみることも可能である。斉

明五年紀の「至肉入籠」も同様で、いずれも瀧川のように北進の時間的順序に従って書かれているとみて解釈するか、田名網のようにすべてをまとめて秋田・能代のなかで解釈するか、両説とも可能である。どちらが是かはより精密な書紀の文献批判に帰する、としている。

また松原弘宣「45」のように、田名網の瀧川批判はすべて当然で、何も付け加えることはないという立場をとる論文もある。

たしかに両者の論点は、いずれとも言えるものが多い。その評価については、さらに別な視点をも踏まえて検討する必要があるので、後にまとめて私見を述べることにする。

④渡嶋Ⅱ本州北部総称説の終焉

本稿②でみたように、津田説とそれを踏まえた一連の学説が、その後、学界では優位に立つていくわけであるが、それに対して、やがて北海道説の立場から有力な批判が相次ぐことになる。その端緒となったのが、児玉作左衛門「34 36 37」である。その要点は以下の通り。

①渡嶋は民族名である。

〔根拠〕斉明紀には「渡嶋」単独では現れず、「渡嶋蝦夷」という用法しか見られない。これは渡嶋が地名ではなく民族名だからである。比羅夫は、通常の蝦夷と異なる容貌の蝦夷（すなわちアイヌ）¹⁹に興味を持ったのであろう（34—35頁以下）。

②渡嶋は北海道である。

〔根拠〕A 斉明四年紀「史料1」だけみると津田説②のようにも読めるが、斉明六年紀「史料2」では陸奥蝦夷と渡嶋蝦夷とが対比されている。ここでの陸奥は鰯田・淳代・津軽の総称であるから、それと対比される渡嶋は北海道としか解することができない。斉明五年紀には、鰯田・淳代・津軽・胆振蝦夷がみえるが、そこには総称

としての渡嶋蝦夷という表記がないことも総称説が成立しない証拠である(34二〇七頁以下)⁽²⁰⁾。斉明元年七月紀でも、越蝦夷が柵養蝦夷、陸奥蝦夷が津刈蝦夷に対応していて、津軽が陸奥に入っている(三二頁以下)⁽²¹⁾。

B 斉明紀には熊献上の記載があるが、熊は北海道にしか住んでいない。津田「14二八七頁」説・田名網「20一八頁」説では、延暦二十一年太政官符「史料7」を援用して、北海道との交易の成果だとするが、北海道との交流は古くから盛んであったのだから、直接北海道へ行ったとみればすむことである。さらに当時既に交易の対象としての北海道の存在を認めるのなら、なぜ渡嶋にそれが含まれないのか説明できない(34一二二頁以下)。

③ 渡嶋蝦夷の一部は津軽に渡り住んでいる。

〔根拠〕A 斉明四年紀「史料1」についての津田説②の解釈を、右の児玉説②Aの結論をふまえて考え直すと、有間浜で饗宴された渡嶋蝦夷とは、北海道の蝦夷で津軽に渡り住んでいたものとすればよい。奥羽に古くからアイヌが居住していたことはアイヌ語地名の存在から明らかである。⁽²²⁾「渡嶋蝦夷等」と「等」があるので、他の陸奥蝦夷も招かれたであろうが、渡嶋蝦夷の容貌が注目され、それらが主体となって史料に明記されたのである(34一〇七頁以下)⁽²³⁾。また①にあるように、もともと渡嶋は民族名であるから、移住したものの居住地とは関係がない(三二五頁)。

B 養老二年紀「史料4」に出羽・渡嶋蝦夷が馬を運んだことがみえる。津田説では、渡嶋を船で行くところと解釈するから、多数の馬を船で運んだことになってしまいが、それは考えがたい。北海道に馬が入るのは後世であるので、この史料は、津軽に渡り住んでいた渡嶋蝦夷とみて陸路による馬の運送を示すものと考え(34一四頁以下)。

C 田名網説②の宝龜十一年五月紀「史料6」や弘仁元年紀「史料8」、元慶紀「史料10 12 13」も、津軽に住む渡嶋蝦夷と考えれば解決すること(34一一五頁以下)。

D とくに元慶紀では、渡嶋蝦夷と津軽蝦夷とはつきり区別されているので、津軽は渡嶋に含まれていないことは明確。津田説③のような理解は不自然である(34一一五頁以下)。

こうした児玉説は、研究史的には以後の北海道説再生の起点と見做すべきものであり、その発想にヒントを得た研究が生まれていった結果、以下に述べるように、津田説①の論点をのぞいて、津田説②③の論拠はほぼ崩壊していくことになる。

また古来議論のある斉明紀の比羅夫「北征」関係記事の史料批判の進展も無視できない。とくに熊谷公男「53」⁽²⁴⁾のそれは、細部になお様々な論点が残されているとはいえ、現時点でも一つの到達点を示すものである。本稿でも、史料批判については、基本的に熊谷説に従うこととする。さてその上で、津田説批判について、本稿⑤で要約した、それと密接に関わる瀧川―田名網論争の評価を交えながら、以下にその要点を掲げる。

・津田説②の斉明四年紀「史料1」の解釈について

この論点は、もともといかようにでも読みとることができるという要素が強い。この部分については、本稿④で既述したように、瀧川説①と田名網説③との対立があり、そこでふれた虎尾「29」の説くごとく、すぐにどちらかは決定できない部分である。ただ熊谷説の史料批判により、斉明四年紀と同五年紀とを別記事とみれば、有間浜を南に考える田名網説③の方が理解しやすいが(有間浜の現地比定については後述)、そう読んだとしても、そこからただちに津田説のような総称説の理解が出てくるとは限らない。大饗された渡嶋蝦夷が、齋田・淳代・津軽の蝦

夷とは別であると解することは、それほど不自然な史料の読みではない。⁽²⁵⁾
 なお松原「45」は、これらの史料について独自の読みをするものであるが、それについては後述する。

・津田説③について

これはもともと、おそらく津田自身も気にしていたはずであるが、右の斉明四年紀「史料1」についての津田の解釈、すなわち渡嶋＝本州北部総称説そのものを成立しがたくさせる要素を持つものである。

渡嶋が、和語として、陸路の整備が不十分で船で行くところ（陸路ができるまでの一時的な呼称）という意味であることからすれば、たしかにその範囲が変化するということが分らないではない。

しかしながら、元慶の乱に関する一連の史料「10」・「13」で、明確に渡嶋と津軽が区別されている以上、児島説③Dにあったように、これは苦しい解釈と言わざるを得ない。⁽²⁶⁾ 津田説では、津軽にも広狭二義があるとしているが、これも決定的な解釈ではない。⁽²⁷⁾ 実際、津田説の流れをくむ諸説でも、本稿②で既述したように、村尾「22」・松原「45」などは、地域の変化ということは否定しているのである。もともと強固な津田説の継承者であるとされる田名網説でも、渡嶋が指す地域についてはむしろ固定的にとらえられていた節がある。⁽²⁸⁾

また熊田亮介「54」が指摘するように、元慶三年紀「史料12」によれば、渡嶋は「夷首百三人、率種類三千人」を擁する集団であって、津田説に言うような、狭小な地ではあり得ない。⁽²⁹⁾

また児玉説②Aで提起された「陸奥蝦夷」との対比「史料2」も無視できない重要な論点である。⁽³⁰⁾ この「陸奥」の解釈をめぐるのは、以後、様々な論点が提示され、今なお必ずしも完全に解かれたわけではないが、この部分については、「陸奥」に齋田・淳代・津軽が含まれる可能性が高い。この点からもやはり津田の言う総称説の成立は困難である。

また児玉説①の大前提である、渡嶋を本拠地にちなむ民族名とする点

については、その後、熊谷「53」に継承された。熊谷も渡嶋は単なる地域名ではなく、その地域を本拠とする蝦夷集団に対して使用されており、⁽³²⁾ また宝龜十一年紀「史料6」にあるように渡嶋蝦夷は長く朝貢を続けているから、そうした特定の地域の蝦夷集団を他と区別するために固定的に指称されたものだとしている。この点からも、津田説③は、やはり成立が困難であろう。

・津田説②の養老四年紀「史料5」の解釈について

瀧川説③と田名網説②とでも対立している。この論点についてはもともと循環論法の嫌いがあるが、これまで述べてきたように、総称説が崩れてくると、「渡嶋の津軽の津の司」と、津軽が渡嶋に含まれるような訓みをするのは無理であろう。「渡嶋と津軽との津の司」「渡嶋と、津軽の津との司」といったところであろうが、前者であろうか。渡嶋・津軽という一つの連続した地域名とも解釈できる。

以上のように、津田説の渡嶋＝本州北部総称説は、これらの問題点が浮かび上がった時点で、ほぼその成立が不可能になった。また津田説を修正しながら継承した諸説についても問題点が明らかになる。

・村尾説について

村尾説では、既述したごとく、津田説③のような、対象となる地域が変化するという視点は打ち出さなかったが、やはり総称説を採っていた以上、その成立は困難である。⁽³⁴⁾

・松原説について

本稿②でふれた松原説のうち、まずその前提となる斉明四年紀「史料1」の解釈は、やはり問題であろう。斉明紀の史料批判についての熊谷説（斉明四年紀と同五年紀とを別事象と見る）に立てばなおさらのことであるが、「恩荷の淳代・津軽郡領任命」をうけての渡嶋蝦夷の饗宴」という解釈は明らかに誤りである。また熊谷説に立たなくても、関口明

〔50〕にあるように、松原説のように解釈するためには、なぜ齋田・淳代にかえて渡嶋という表記を使うのが説明されなければならない。⁽³⁵⁾

また渡部育子〔49〕も、松原説は説得力に欠けるか史料解釈が妥当ではないとしている。とくに養老・宝亀の記事〔史料4・6〕の渡嶋が秋田・能代と解釈できる根拠が不明で、宝亀十一年紀〔史料6〕については、宝亀二年六月紀で、野代湊を出羽としているのだから、野代を渡嶋に入れるのはおかしいと論じる。⁽³⁶⁾

さらに熊谷説にあるように、貞観十七年紀〔史料9〕で、渡嶋と秋田が明確に区別されている以上、渡嶋に秋田が含まれるという松原説は、その成立はもはや不可能といえよう。⁽³⁷⁾

・田名網説①について

児玉説でもとくに問題にされていないように、本質的な論点ではないが、本稿末の史料に掲げたように、渡嶋という呼称は九世紀で途絶えている。杉山莊平〔38〕が明言するように、この論点は論争からはずすべきであろう。

・瀧川説② 田名網説②について

瀧川説②の前半はもつともであるが、しかし有間浜の位置（後述）によつては、渡航先がただちに北海道となるわけではない。既述したように、近年まで津軽半島北部日本海側は陸路が通じていなかったのである。瀧川説②の後半は田名網説②にあるように問題とならない。

・瀧川説③ 田名網説②の史料解釈について

養老四年紀〔史料5〕については既述したが、それ以外の持統十年紀〔史料3〕・養老二年紀〔史料4〕・宝亀十一年紀〔史料6〕についての議論は、どうにでも解釈できる要素が強い。なお養老二年紀〔史料4〕については後に本稿⑥で改めて検討する。

またここでは論争にならなかった弘仁元年紀〔史料8〕・貞観十七年紀〔史料9〕については、児玉説③Cでも少し触れられているように、本州

のうちに収める方が理解しやすいように思われるが、これも確たる根拠を示すことができるわけではなく、印象論にとどまろう。

・瀧川説④ 田名網説④の後方羊蹄の解釈

瀧川説の後方羊蹄についての訓みは明らかに問題がある。田名網説の理解は十分あり得るものであるが、この問題は重要な論点を含むので、後にやはり本稿⑥であらためて検討することとする。

・瀧川説⑤ 田名網説⑤について

この問題はとくに議論する必要はなからう。ただすでに児玉説②Bにも見え、また後に本稿⑥でふれるように、北海道と本州の交流は、縄文以来かなり深い交流があったことはいままでもない。

以上のように、津田説の系譜を引く渡嶋＝本州北部総称説は、いくつかの有効な論点はあるものの、結論としては成立しがたいことはや明らかである。もつとも児玉説③は、渡嶋蝦夷の内に、本州北部に移住した集団の存在も認めるという注目すべき論点を含むものであるが、この問題については、やはり本稿⑥で詳細に再検討する。

さてこのように渡嶋＝本州北部総称説が崩壊すると、以後の諸論考では、渡嶋＝北海道説にたつものが急増していった。ただそれらは、原〔渡嶋＝北海道〕説と同様、津軽の北にある渡嶋は、それが本州でない以上、北海道であることは自明であるという論調が基本であった。

たとえば大山梓〔25〕は、田名網説批判のなかで、津軽は本土北辺であるから、その北の渡嶋は北海道と見ることは当然であるとする。

新野直吉〔35〕では、淳代が能代であるとすれば、その北の津軽は（同様の立地の）岩木川河口部に求めるのが妥当であるとし、有間浜は十三あるいは小泊あたりと推測する。また「熊」とあるから渡嶋には北海道が含まれるとする。さらに『日本書紀』斉明紀の記述で、後方羊蹄以下には訓があるが齋田以下には訓がないことを挙げて、両者の実態が

違うことを主張し、その点からもそれらの後方羊蹄以下を含む渡嶋を東北の外、すなわち北海道に求めることができるとしている（一六頁以下）。また新野「43」では、斉明四年七月紀にみえる「津軽郡大領馬武」の領域の港を十三湊であるとし、ここは北の玄関口を支配する重要な役目を担っており（二二頁）、そこから北へ行くのだから渡嶋は当然北海道であるとしている。斉明六年紀「史料2」の大河はその渡嶋（北海道）のなかの大河であるという（一五頁）⁽³⁸⁾。

なお渡部育子「49」も全面的に新野説に従うとしている。

また石附喜三男「41 42 52」も同様で、文字通り素直に津軽半島より北へ海を渡った島となれば、それは北海道であると言う（中世の日本海交易のルートも念頭にある）。「巖」についても、新野説と同様の見解である。斉明六年紀「史料2」の「大河」は石狩川であるとし、八幡町遺跡（石狩町）の合葬墓を比羅夫との戦闘の結末と関連づけて論じている。また関口明「50」は、渡嶋は、齋田・淳代・津軽より北の、弘仁元年紀「史料8」にあるように、水路で繋がった地と見るべきで、それは当然北海道であるとする。一方、元慶の乱では、津軽に対して上野国軍による陸路の征討が強く意識されており、津軽は水路で繋がった渡嶋とは別であるとする。

関口「55」では、斉明紀にみえる北方の産物を強調し、渡嶋については、北海道説を自明のこととして論を展開している。

また同じく関口「63」でも新たな論証はないが、右掲の石附説「42」を引いて、斉明六年紀「史料2」の「大河」は石狩川であるとしている（三五頁以下）。

関口「65」でも、渡嶋の現地比定についてとくに新見解はないが、延暦十四年十一月三日紀にみえる「夷地志理波村」を渡嶋のうちとし、地形図上でシリバに当たる地名があるのは全国で釧路と余市だけであるので、余市がその比定地の有力候補であろうとする⁽⁴⁰⁾。

熊田亮介「54」では、渡嶋はトシマかオシマかワタリシマかは不明であるとし、古地図に登場する出羽の海上の止島に注目するという新しい論点を提出した。本州内陸説は採らないが、現実にそれがどの島という点については保留し、あるいはこれは架空の島かもしれないと述べた（一八六頁及び付記（6））。

熊田「60」では、右の見解を一步進めて、その古地図にみえる止島について、江戸時代以降の古地図上の止島は山形県飛島であるが、行基図の止島は北海道であるという憶測を捨てきれないとし、渡嶋＝北海道説を提案している（五二頁以下）。

ただその熊田説の前提となっている、渡嶋の訓がトシマかオシマかワタリシマかは不明であるという点については、私としては旧稿でもふれたように、やはり『釈日本紀』巻二十秘訓五に「ワタリノシマ」とあるのを重視したいと思うので、この点の説明がほしいところである。

また熊田説では、肅慎について、注目すべき見解が示されている。斉明六年紀「史料2」によれば渡嶋に來ている肅慎は「已柵」を築いたとあるので、一過性の集団ではなく定住しているものと見做されるとする⁽⁴¹⁾。つまり渡嶋は肅慎の居住地でもあると言う。また持統十年紀「史料3」の「肅慎志良守」と宝龜十一年八月紀の「狄志良須」とは訓の「シラス」が共通しており、渡嶋蝦狄に肅慎が含まれることがわかったという。また養老四年紀「史料5」の「靺鞨」は渡嶋の肅慎の後裔であり、靺鞨国は渡嶋であるという斬新な説も提示している（一八八頁以下）。これらの点については、あらためて本稿⑤で触れることとする。

なお右記の熊田説に関連して千田稔「64」も、吉田東伍以来の有間浜Ⅱ江流末説を採り、そこから渡るところは北海道であろうとして、渡嶋Ⅱ北海道説に従う。ただし最古の地図である行基図には北海道はみえないとしている点が、熊田説とは異なる（一三八頁以下）。

熊谷公男「53」も、津軽が野代の北で、渡嶋はその津軽よりもさらに

遠方だから、これはもちろん北海道であるとする（七六頁）。肅慎と熊も渡嶋蝦夷と関わるので、渡嶋＝北海道説の傍証になると言う（七七頁）。

中村英重「58」も、比羅夫の時代については慎重に保留しているが、養老年間以降は、渡嶋は北海道であるとする。津軽とは現在の津軽半島を指すことが確かであるからという。

北構保男「61」も、当時の水軍の能力からみて北海道へ行ったとみたいと言う。『通典』に蝦夷国が海島中の小国であるとされていることも北海道説の根拠としている。⁽⁴²⁾ また右掲の石附説を引き、石狩川水系の社会は発達して人口密度も高く、この地で大河といえるのは石狩川しかないとして、斉明六年紀「史料2」の大河＝石狩川説に賛同する。ただ児玉説同様、本州側居住地もみとめている（一八一頁以下）。

以上のように、津田説崩壊後の北海道説は、論拠としては原「渡嶋＝北海道」説（津軽の北をストリートに北海道であると見做す説）をさほど越えるものではないが、本州北部総称説を論破したことにより、自信を持って津軽の北にある地としての北海道を断定的に提唱するに至ったものとまとめることができる。

⑤ 新北海道説の台頭

近年になって、豊富な北海道考古学の成果や、広く中国大陸までも含む北方世界全体の動向をも十分に踏まえた、意欲的かつ画期的な研究が相次いで発表されるようになり、渡嶋＝北海道説は通説といってもよい状況を呈するに至った。以下に順をおって紹介する。

・養老二年紀「66」

① 有間浜は十三湊とみる。

〔根拠〕 有間浜について秋田浦に比定する説もあるが、そのためには

渡嶋を本州内に比定しないといけない。しかし諸先学が述べているように渡嶋は北海道と考えられるので、それは採らない。後の時代の繁栄からみても十三湊説が魅力的である。斉明四年紀「史料1」の「遂に」は遠征到達の北限を示すとみる⁽⁴³⁾（四九三頁）。

② 渡嶋蝦夷と津軽蝦夷との間には日常的な交流が存在した。

〔根拠〕 考古学の成果によれば、土器をはじめとして人間集団までも含んだ集団による津軽海峡を挟む交流があったことが知られる。児玉説にあるように比羅夫の北征は冒険ではなく、それまでに存在していたこうした交流を前提とするものである（四九四頁）。

③ 後方羊蹄は余市であった可能性が高い。

〔根拠〕 瀧川説④や児玉説のような旧来の後方羊蹄＝余市説は、地理的特性から導き出されている。しかし北海道余市町大川遺跡ないし周辺遺跡の出土品から見て、余市は古代を通じて北海道の中心地であった可能性がある（五〇四頁以下）。

④ 斉明六年紀「史料2」の「大河」は石狩川であろう。

〔根拠〕 ③の後方羊蹄＝余市説にたつ以上、「大河」を余市川とする説も有り得るが、この史料は、前年の北征よりさらに北進していると解釈するのが自然であり、また石狩川低地帯のもつ重要性から見て、石狩川説を採るべきである（五〇八頁）。

⑤ 養老二年紀「史料4」の解釈について

〔根拠〕 本条の馬について、北海道における馬の登場が近世に下ることをもって、渡嶋＝北海道説を批判する説があるが、近世アイヌと古代を直接結びつけられるかどうかは分らない。また児玉などが説いているように、津軽に移住していた渡嶋蝦夷がいるのだから、そうした集団と出羽蝦夷と共同で馬を貢上したと解すれば問題はな

い（五二二頁）。

さらに養島〔68〕では、次の論点を加えている。

⑥ 渡嶋蝦夷は捺文集団である。

〔根拠〕考古学の成果により、もう渡嶋＝北海道説で何ら問題はない。捺文文化における中央的要素や、道央・道南と東北北部は九世紀まで一体であったとする考古学の成果を踏まえて、北海道の捺文集団こそが渡嶋蝦夷であると考え（三三頁以下）。また肅慎はオホーツク集団と考えられるが、捺文文化集団にしろオホーツク文化集団にしろ、実態としては一つの民族としての意識はなく、可変性・重層性をはらんだ複数の民族集団である。もともと両者の間には接触融合が繰り返されたが、異質性は保たれた（三五頁以下）。

・若月義小〔67〕⁽⁴⁴⁾

① 渡嶋蝦夷は統縄文文化から捺文文化への転換の主体である。

〔根拠〕水田耕作を受容した形跡のない渡嶋蝦夷＝道南の「民族集団」の服属は、津軽蝦夷を含む通常の蝦夷の服属とは違った「事件」である。その服属は、倭人の文化生活の摂取を経て、統縄文文化から捺文文化への転換をもたらしたが、その主体こそが渡嶋蝦夷である。

服属の結果、彼らは倭国風に渡嶋といわれた（四頁以下）。

② 渡嶋蝦夷の服属は天智七年（六六八）以後である。

〔根拠〕斉明五年紀所引伊吉連博徳書は、中国史料から裏付けられるので年次は確かであるが、そこで最遠の蝦夷を津軽（都加留）と言っている渡嶋の名がみえないので、渡嶋蝦夷の服属はこの年以後のことと分かる。また斉明六年紀にみえる、朝廷で饗応されたという肅慎は、渡嶋蝦夷とは無関係に入貢している（熊も渡嶋蝦夷と関係なく、肅慎からの献上品であろう）ので、渡嶋蝦夷の服属はさらに後になる。斉明紀の北征記事に「闕名」とあって比羅夫の名がない

のも、比羅夫は当時はまだ阿倍引出臣という傍系であったからであろう。正宗を次ぎ阿倍臣を名告り「筑紫大宰帥大錦上」であったのは天智七年（六六八）ころに限定される。したがって比羅夫北征記事は高句麗滅亡後かなり短期間に生じた事態である。高句麗滅亡による七種の靺鞨の政治秩序の崩壊によって、挹婁系靺鞨（『日本書紀』に見える肅慎）がサハリン・アムール川河口へ遷住し、それが渡嶋蝦夷の脅威となり、斉明六年紀「史料2」に、肅慎の侵攻として記録されたのだ（六頁以下）。

③ 越国軍は有間浜＝十三湊、後方羊蹄＝余市を基地とする。

〔根拠〕瀧川説・児玉説に従う（八頁）。

④ 渡嶋蝦夷には、それらと共存する靺鞨族が含まれていた。

〔根拠〕斉明紀にみえる肅慎の朝貢は、唐・新羅の軍事同盟に対抗するためにヤマト王権に保護を求めてきたものである。持統十年紀「史料3」は、道南の渡嶋蝦夷と道北・道東の肅慎との平和的共存関係の整備を示す。こうしてヤマト王権に服属した共存する靺鞨は、八世紀以後渡嶋と一括され渡嶋蝦夷・渡嶋狄と呼ばれるようになる（二〇頁以下）。

⑤ 狄馬交易は、靺鞨から津軽蝦夷を介してのルートが定着したもの。

〔根拠〕養老二年紀「史料4」や元慶二年六月紀には、多数の馬がみえ、出羽国の狄馬交易ないし牧の経営への深い関わりが推測されるが、放牧の適地を有する津軽蝦夷が介在して勿吉系靺鞨の鉄利部や挹婁系靺鞨の率賓部などから狄馬＝蒙古系駿馬を得たものと思われる（一七頁）。

・樋口知志〔69〕

① 有間浜は十三湊、渡嶋は北海道とみる。

〔根拠〕斉明四年紀「史料1」「遂」は、瀧川説①・北構〔61〕にある

ように、有間浜を北限としたと読めるので、やはり諸先学が説くように有間浜は十三湊と解せられる。渡嶋蝦夷はそこへ船で来たのだから北海道から来たとしか解せられない(七六頁)。

② 斉明五年紀の諸地名は渡嶋＝北海道の内である。

〔根拠〕「一所」は具体的には不明であるが、そこに集まった胆振組は渡嶋の内(熊谷説)である。津軽まではすでに斉明四年中に達しているのだから、肉入籠・問菟・後方羊蹄などの見慣れない地名も渡嶋＝北海道の内であろう(七六頁)。⁽⁴⁶⁾

③ 石狩平野に本州系遺物が多いのは、比羅夫の遠征の影響である。

〔根拠〕石狩平野の終末期古墳、余市の大川遺跡などには多数の本州系遺物が見られる。その流入が比羅夫の遠征の影響を受けた現象とみるとよく符合する(七七頁)。

④ 養老二年紀「史料4」の解釈について

〔根拠〕この史料にみえる馬について、恵庭からは馬具が出土しており、近世アイヌとの関係(北海道への馬の登場が遅れること)だけから問題視するのは誤りである。この史料自体、『続日本紀』にもみえず、信頼を置きたい(七七頁)。

⑤ 蝦狄には肅慎が含まれる。

〔根拠〕持統十年紀「史料3」以後、肅慎が史料から消える。従来は肅慎をオホーツク文化との関係でとらえる説が有力であったが、オホーツク文化は常に大陸を向いており、この史料のような本州との交流の痕跡がない。一方、渡嶋蝦夷という用語も同じ頃に消滅し、新たに蝦狄という用語が登場する。熊田説にあるように、そこに肅慎が含まれる。

以上が、近年の主要な業績の要点である。これらの見解に共通した特徴をまとめると次のようになる。⁽⁴⁷⁾

① 比羅夫は斉明四年の内に有間浜＝十三湊まで進出し、ついでそこから北海道へ進んだ。したがって渡嶋は北海道である。

② 渡嶋が北海道であることは、考古学的成果による北海道と本州との盛んな交流を示す遺物の存在からも証明できる。

③ したがって渡嶋蝦夷は北海道の擦文集団。それに肅慎の一部が含まれる。

④ 北海道説に対する有力な反論であった渡嶋蝦夷の馬の貢上「史料4」について問題にしない。

こうした新しい見解は、私の旧稿とかなりの部分で対立するものである。もちろん、その後の研究の進展によつて私見を改めるべき箇所は多々あるが、なお従えない点も残される。最後に次章では、それらの点について論じることとする。

⑥ 津軽海峡を挟む世界と渡嶋

これまでみてきた渡嶋の現地比定についての諸説は、基本的にそれ为本州の内におさめるか、北海道に比定するかという対立軸の上にあった。しかし従来の研究のなかには、その枠に当てはまらない、もう一つの流れがある。それが、渡嶋を津軽海峡を挟む本州と北海道の両方に跨がる世界に比定するものである。旧稿「62」もこの立場から論じたものであった。

すでにふれたように、児玉説・北構説⁽⁴⁸⁾などのなかにも、渡嶋蝦夷の一部が津軽に移住していることを認める学説があった。ただそれらは、あくまでも主体は北海道側に求めているので、学説的には明確に北海道説である。

渡嶋を、津軽海峡を挟む世界に位置づけようとする学説としては、ま

ず杉山莊平「33 38」を挙げることができよう。ただ杉山「33」は、もともと斉明紀比羅夫北征記事の史料批判に主眼があり、斉明紀にいう三年三回の遠征は、実は一年一回限りのものであるということの論証に紙幅を費やしており、地名考証についてはあまり詳細ではなく、結論的にしか述べられていない。これまで取り上げてきた論点に関わる部分だけを抜き出すと、

①渡嶋は鰐田・淳代・津軽・胆振鉏を包括する地域であつて、本州北地に対する総称である（一〇五頁）。

②斉明五年紀の「一所」は有間浜を指し、それは鰐田・淳代・津軽・胆振鉏の蝦夷を集めるのに好適な、秋田以北の本州日本海岸である。

③肅慎とは、本州北部の渡嶋へ北から押し寄せたのだから北海道の住民である。沿海州方面の住民の一分派と考えられる。

④斉明六年紀「史料2」の「陸奥蝦夷」は渡嶋蝦夷の誤記であろう。といった点が挙げられる。

したがって、その時点での研究史を丁寧に整理した児玉「34」では、この説は、本州北部総称説として取り上げられたのも無理はない（二二七頁以下）。

そこで杉山「38」では、渡嶋の現地比定についての真意は、「本州の北部、およびさらにその北方（北海道西南部）」（三四頁註（24））であるとし、再度やや詳細にこの問題を論じ直している。

杉山「33」①について

〔根拠〕比羅夫の北征は一回限りのことなので、斉明四年紀「史料1」と斉明五年紀とを対比させると、有間浜Ⅱ一所であるから、そこに大饗された渡嶋蝦夷「史料1」とは鰐田・淳代・津軽・胆振鉏蝦夷（斉明五年紀）であつて、渡嶋はそれら四つの集落の総称である。

斉明六年紀の渡嶋蝦夷も、特定の集落を指すのではなく、本州北部

の蝦夷の居住形態を概念的に表したものである（二二頁）。

⑤渡嶋には北海道が含まれる。

〔根拠〕斉明五年紀の「後方羊蹄」は渡嶋の最奥部である。これは「シリヘシ」（シリベシ・シリベシ）と訓むアイヌ語地名であつて、現存のアイヌ語地名との関連からそれを北海道に求めたい。⁴⁹その意味は「水にのぞんだ断崖」ないし「高き山から流れ出る川」であるから、地形と現存地名との対比からみて、尻別川河口を候補として挙げたい⁵⁰（二三頁）。また弘仁元年紀「史料8」について、田名網「24」は、先に田名網説②で触れたように、北海道とみる必要はないとしているが、出羽国の所管であるからといって北海道が含まれることを否定できないであろう⁵¹（二七頁）。

⑥養老二年紀「史料4」の解釈について

〔根拠〕馬は当時北海道にいなかったから、この渡嶋は本州部分である（二四頁）。

⑦養老四年紀「史料5」の解釈について

〔根拠〕これは「渡嶋の津軽の津司」と訓む。渡嶋に津軽が含まれる証拠である（二五頁）。

⑧渡嶋の本義は、内国としては扱われていない地域の総称である。

〔根拠〕津田説では渡嶋の字義について、海路にこだわるが、秋田方面に陸路が通じて以後も渡嶋の呼称は残ることから考えると、むしろ「律令体制のなかに完全にはくみ込まれていない、つまり内国として扱われていない地域の総称」というような政治的意味を第一義とするのではないか。古代史上の渡嶋はすべてこれで理解できる。渡嶋の指す地域が変化していくということは、むしろこの字義から考えた方がわかりやすい（二六頁）。

⑨元慶三年紀「史料12」の解釈について

〔根拠〕津田説③にあるように、ここでは津軽の特殊性から、渡嶋か

ら津軽が区別されたのである（二八頁以下）。

⑩渡嶋の消滅は古代律令国家の蝦夷経略の終了を意味する。

〔根拠〕寛平五年紀「史料14」で渡嶋の名称は歴史から消えるが、これとほぼ時を同じくして古代律令国家による蝦夷経略の終了していることは興味深い（二九頁以下）。

ところで森田悌「59」は、北海道説の興隆のなかで発表された、渡嶋本州説であるが、おそらく杉山説を知らずに書かれたものであったために、杉山説⑤を除いて、よく似た論理を展開しているので、ここで取り上げてみる。なおその一部は、本稿①の津田説批判のなかで既述したところである。

①養老二年紀「史料4」の解釈について

〔根拠〕この史料に渡嶋蝦夷が馬を貢上したことがみえるが、北海道のアイヌが乗馬の習慣を取り入れるのは、近世に入って幕府が駅通制を北海道に持ち込んでからである。

②元慶三年紀「史料12」の解釈について

〔根拠〕この史料では明確に渡嶋と津軽とが区別されているので、渡嶋は特定の地名であって、津田説にいう総称説はなりたたない。松原説も、貞観十七年紀「史料9」からみて、成立しがたい。⁵²⁾

③渡嶋は有間浜Ⅱ十三湊付近である。

〔根拠〕坂本「23」に従って、斉明四年紀「史料1」と同五年紀とを同一の遠征とみると、前者の齋田・淳代二郡の鎮撫と淳代・津軽二郡の郡領任命が、後者の鮑田・淳代・津軽および胆振鉏の蝦夷大饗に対応し、また前者の渡嶋蝦夷の召聚が、後者の肉入籠における行動に対応している。したがって有間浜のあたりが渡嶋、肉入籠をその地名と解釈できる（二五六頁以下）。津軽は能代より北で、渡嶋は津軽よりも北だから、鰺ヶ沢あたりが津軽、十三湊周辺が渡嶋で

あろう。ここには岩木川があって斉明六年紀「史料2」の「大河の河口」と対応する。

④肅慎は、渡嶋にかなり近い北海道の住民である。

〔根拠〕斉明六年紀「史料2」によれば、渡嶋Ⅱ十三湊の蝦夷を肅慎が来襲しているので、肅慎とは渡嶋にかなり近い北海道の住民であろう。蝦夷とは違った呼称で呼ばれているのは、それがアイヌ系の人々であるからである（一五八頁）。

⑤養老四年紀「史料5」の解釈について

〔根拠〕右記したように、渡嶋も津軽も特定の地域名であるから、渡嶋津軽津司は、渡嶋と津軽とそれぞれの津役所と解すべきで、それは港湾のみならず後背地をも管理したのであろう（一五八頁以下）。

この両説の所論については、本稿前章までに記した、津田説以来の渡嶋Ⅱ本州説に対する批判的論証によって、すでに評価が定まっている部分も多いが、ここでもあらためてまとめておく。

杉山説①の総称説が成り立たないことは、本稿①で論じた通りであるし、また斉明六年紀「史料2」の渡嶋の解釈もかなり不自然である。北征一回説についても、前章で触れた通り、本稿では斉明紀の史料批判について詳論する余裕がないが、とりあえず現時点では熊谷説に説得力があり、杉山説の史料批判には従えない。その点、森田説③の論証法はこの杉山説①にきわめて近いが、同様の理由で従えないことになる。

杉山説③は、肅慎をツングース系韃靼とみるものであるが、これについては、前章で触れたような新しい見解があって、今後慎重に検討を進める必要がある。森田説④の、肅慎を北海道の住民（アイヌ）とみる説は、これは菊池山哉「18」・田名網宏「20 24」・坂本太郎「23」以来の古典的な説であって、たしかに斉明紀の記述にそうと、渡嶋の比定地如何に関わらず、北海道の住民と読み取れることは間違いないわけであるが、

既述した通り、古代においては「アイヌ」という呼称は問題があるともにも、その内実について、やはりもう少し詳細な検討が必要である。

杉山説④については、既述した通り誤記説は問題であろう。

杉山説⑤については、結論はともかく、本州北部にもアイヌ語地名が広く残存している以上、方法的に問題がある。

杉山説⑥・森田説①の馬の問題については、本章で後述する。

杉山説⑦は、このままでは循環論法である。また前章で触れ、さらに森田説⑤にもある通り、渡嶋Ⅱ総称説が崩壊すると、成立不可能となる。

杉山説⑧は、あくまでも総称説にこだわるからこういう理解に辿り着くのであって、総称説が成り立たなければ、こうした議論は必要ない。また津田説③批判にある通り、地域名の変化も認める必要はない。杉山説⑨のような議論は不要である。

さて以上、旧稿「62」をのぞいて、これまでの渡嶋についての研究史の梗概と、それに対する現時点での見解をまとめてみた。

次に以上の結果を踏まえて、その問題点と、それに対する私見を述べてみたい。

(ア)『日本書紀』の史料批判・解釈

この問題は、議論の前提となる根本的な問題でありながら、もともと厄介な問題でもある。ただ「大化改新」論をも含めて、近年のこの問題に関する様々な研究を総合して考えてみると、既述したように、基本的には熊谷「53」の説によって、大筋で『日本書紀』の記載にそって理解する立場をとってよいのではないかと思われる。

ただ正史の北方関係記事におけるこの問題に、早くから積極的に取り組み、相次いで研究を発表してきた若月説については、最低でも熊谷説の立場からそれを説明できるかどうかについて、触れておく必要がある

う。

まず若月説②についてであるが、斉明五年紀所引伊吉連博徳書に、最遠の渡嶋が見えないという問題については、それはまだ渡嶋が、自ら朝貢してきた津軽ほどには服属していなかったからであろう。中央への成果報告も不十分で、中央の人々の意識に、渡嶋という語がまだそれほど浸透してはいなかったのではないかと考えてみたい。

また斉明六年紀に朝廷で饗応された肅慎は渡嶋蝦夷と無関係に入貢したもので、熊も渡嶋蝦夷と関係なく肅慎からの献上品とみる若月説の理解についてであるが、これは熊谷説の理解にそって『日本書紀』の記載順に年次をおって理解していくと、当然のことながら若月説のように理解することはできない。熊谷説の基礎の一つとなっている井上「39」の理解に従って問題なからう。

なお当該史料の熊を渡嶋蝦夷と無関係とみなすことは、渡嶋Ⅱ北海道説の論拠の一つであった熊を、渡嶋から分離することになり、解釈のしようによっては北海道説の主要根拠の否定にもつながるが、これは本章(ウ)で後述する馬の問題とあわせて考える必要がある。

ただし大陸の鞅鞞の動きを念頭におくべきであるという主張は、今後十分に検討しながら継承すべき重要な視点である。⁽⁵⁴⁾

(イ)有間浜・後方羊蹄・津軽

本稿①の末尾でまとめたように、近年の有力な学説は、基本的にすべて有間浜Ⅱ十三湊説をとっている。

斉明紀の有間浜を十三湊に比定する説は、早く吉田東伍「有間浜」[7]・喜田貞吉「17」などにみられるもので、そこでは後世の私郡の郡名「江流末」に十三湊が含まれることが主要な根拠とされていた。既述した瀧川説①は、⁽⁵⁴⁾それをさらに詳細に論述し、以後、とくに渡嶋Ⅱ北海道説の立場をとる学説では基本的にそれが踏襲されていったが、⁽⁵⁵⁾そこで

もとくに新たな論拠が加えられることはなかった。

しかし旧稿で論じたように、江流末郡の名は、近世の当該地方に関する編纂物にのみみえるもので、「私郡」とされている通り、中世の同時代史料にはまったくみえず、その存在は証明されていないのである。

もともと江流末郡自体は実在しなくとも、『十三往来』などにみえるのだから、近世における地名伝承として残っているだけでも十分であるとの見方もできよう。となると、これは水掛け論に陥ってしまう。

そこでさらに斉明紀の正確な解釈を踏まえないならぬのであるが、この点については本稿③で既述した、瀧川説①と田名網説③の論争以来、まったく深化していない。本稿⑤で紹介した近年の説も同様である。

しかし斉明紀の史料批判についての熊谷説により、斉明四年紀「史料1」と斉明五年紀とを別記事と見れば、有間浜をもっと南に考える津田説以来の田名網説③、古田良一説、井上光貞説「39」等の方が理解しやすいのである。旧稿ではその比定の具体的候補地として、深浦町吾妻浜を挙げておいた。瀧川説にあるように、深浦から鰺ヶ沢にかけては、たしかに大軍船団の停泊地として絶好の場所ではないのであるが、それについては、有間浜での饗宴を船団による進攻とみない田名網説③の立場など、様々な解釈の方法がある。

後方羊蹄についても、そのみからの解決は難しい。瀧川説④と田名網説④との対立について言えば、瀧川説の解釈が苦しく、田名網説の解釈の方が、史料の流れから判断すると有利である。ただし旧稿で、津田説に従って、シリヘシ↓シリベツ↓大河↓岩木川説に立ったのは誤りであった。⁽⁵⁷⁾

もともと、シリヘシ↓シリベシの意味するアイヌ語の本義が「水に臨んだ要害の地」であること、さらに有間浜が深浦と鰺ヶ沢付近である可能性が高いことを踏まえば、結果的には、地名の由来である崖山と

は十三湊北方の権現崎（これまた日本海交通における格好のランドマークである）であり、そのふもとの大船団碇泊のための格好の港である岩木川河口の十三湊を、シリベシと見るという結論自体にはなお固執したいと思う。

渡嶋北海道説では、瀧川説以来、後方羊蹄⇌余市説が採られているが、河野広道「21」のように考古学的成果からそれを疑問視し、北海道式古墳の分布する江別⇌苫小牧地方にそれを求める説もあった。しかし養島説③にあるように、近年の考古学的成果によれば、余市も、道央の北海道式古墳分布地域に劣らない繁栄ぶりがあるという。

ただそのことがただちに後方羊蹄の現地比定につながるわけではない。渡嶋北海道説は、基本的には、本章（エ）で後述する、本州と北海道との交流がその根拠のすべてであるといっても過言ではなく、その結果、渡嶋が北海道である以上、後方羊蹄も北海道のなかで探せば、というのが前提になっている傾向が強い。この点、さらに慎重に扱いたいと思う。また右の点とも密接に関わるが、渡嶋北海道説は、有間浜が十三湊である以上、そこから渡った先である渡嶋は北海道であるのは当然であるという解釈をとるものであった。これは本稿執筆の時点で最新の研究である樋口説①②に至るまで同様である。

しかしこれについては旧稿で論じたように、津軽の範囲を、ストレートに現在の津軽半島全域に当てはめてしまっているという問題がある。もし斉明紀の津軽が、現在の津軽半島全域であったら、渡嶋を北海道とみるのはたしかに議論の必要もなからう。樋口説②も、もともとなこととなる。

また関口「50」で渡嶋は水路、津軽は陸路という対比がなされている（一八頁）点についても、同様に津軽の範囲の問題がある。現在の竜泊ラインを例示して既述したように、津軽半島の内でも、その北部はつい先年まで、水路でなければ辿り着けない地であって、このことを考えると、

関口説もそう安易には受け入れがたい。

歴史的にみると、かつて津軽は、半島全域を示す地名ではなかった。

早く津田説・杉山説・森田説等のなかでも、津軽を限定的にとらえる視点が出されていたが、それは斉明紀の記事の、ある解釈の可能性に全面的に依存しているものであって、渡嶋Ⅱ北海道説には受け入れられなかった。⁽⁵⁸⁾そこで旧稿ではそれに加えて、中世の津軽三郡ないし津軽四郡の範囲が、津軽半島海岸部に及んでいないことを根拠として挙げた。津軽半島海岸部は津軽三(四)郡には含まれない、「西浜」「外浜」と呼ばれた特殊な世界であった。つまり後々まで、「津軽」の外には、海と関わる特殊な世界が広がっていたのである。そしてその世界は、本章(ウ)で詳述するように、津軽海峡を挟んで道南部と同一の文化を共有する、まさに「海峡を挟む世界」であった。旧稿では、そうした世界が津軽の外に広がっていることを重視したのである。もともと、それは中世の津軽の話ではないかという批判もあるが、いわゆるアイヌ語地名からも推測されるように、地名の由来はかなりさかのぼると考えてもよいと思われる、やはりこの点は今なお重視したいと思う。

また旧稿に対しては、津軽と渡嶋が地続きであるとする、アイヌ語地名の津軽だけが、なぜ胆振釧などの渡嶋内部のアイヌ語地名と同列でなく別扱いされるのかという疑問もあるようであるが、これはアイヌ語地名が広がる世界のなかで、斉明元年七月紀にあるように、まず津軽が他よりかなり早く自主的に朝廷に朝貢していたからであり、その北の世界については、比羅夫北征によって初めて知られたため、新たに和人によって渡嶋という総称が生じたのではないだろうか。その際、地続きであるかどうかは問題ではなからう。

渡嶋は中世に登場する「夷島」とは別であって、『拾芥抄』(慶長古活字本)所収の行基図にあるように、「津軽大里」に隣接する「夷地」が、あるいは古代渡嶋の觀念の名残りである可能性もある。⁽⁵⁹⁾

(ウ) 渡嶋と馬

旧稿で渡嶋に本州北部をも含めるべきだとした根拠の一つが、養老二年紀「史料4」に見える「出羽并渡嶋蝦夷」の「貢馬千疋」⁽⁶⁰⁾であった。渡嶋蝦夷と関わる大量の馬の存在は、中世までの北海道に馬の痕跡が見られない以上、本州部分の存在を考えざるを得ないしたのである。旧稿に先行して、森田説①でも同様の指摘がなされていた。

児玉説③Bでも養老二年紀「史料4」の馬の存在は気になったようで、この馬は渡嶋蝦夷のうち、本州に移住していた集団が貢上したものであると解釈されていた。

これについては本章(イ)で触れたように、津軽の範囲の問題から考えれば、あえて児玉説のように考えなくてもよいであろう。児玉説③Aでは、渡嶋は民族名であるから、津軽に移住した蝦夷がいてもそれは渡嶋蝦夷の本拠地の比定には関わらないとするが、理窟としてはそれは認めるとしても、本稿では、そもそもその本拠地という渡嶋に本州部分が含まれるという立場をとる。

それに対して、渡嶋Ⅱ北海道説からは、養島説⑤・樋口説④にあったように、近世アイヌ社会における馬の存在・不存在の問題と、古代渡嶋における馬の存在を直接結びつける必要はない、という批判があり、また養島説⑤では、児玉説③Bを敷衍して、本州側の出羽蝦夷との共同作業(本州での調達)も考えるべきだとされ、若月説⑤でも、狄馬交易は津軽蝦夷の媒介(一七頁)を考えるべきだとされている。さらに樋口説④では、そもそも養老二年紀「史料4」自体が、正史に見えないので疑わしいとされ、⁽⁶¹⁾また恵庭における馬具の出土を例示し、古代北海道における馬の存在も示唆している。⁽⁶²⁾

たしかに養老二年紀「史料4」自体は、その史料性を含めて、それぞれの立場から様々な解釈が可能であり、この点のみから結論を導くのは

困難である。

これは熊について同様である。これは馬の問題と全く逆で、熊が北海道にしか生存しないことは事実であるとしても、渡嶋＝本州説では、それを北海道から入手したものと考えてきた。

児玉説③Bにあるように、馬が船や筏で運ばれることに疑問を感じる説もあるようであるが、それならば、熊の運送も問題にすべきである。もちろん、量の差という問題はあろうが、新野直吉の持論である、「北の海道」説では、東北の名馬は、北の大陸から筏でもたらされたものとされていた。こうした交流といった観点からすれば、やはり馬の問題は決定的な論点とはならないかもしれない。

(エ) 北海道と本州の交流と渡嶋

既述したように、これまでの渡嶋をめぐる論点が、瀧川―田名網論争以来、さほど深化していないのは、実はこの北海道と本州の間の豊かな交流の存在が明らかになるにつれてそれが最大の根拠になってしまい、こうした交流が認められる以上、比羅夫も北海道にまで渡っており、渡嶋が北海道であることは自明であるという論調が強くなってしまったからであり、そうした前提にたつて旧説を理解しているため、旧説の再検討が止まってしまったからである。

しかし離れた地域間での意外なほどの深い交流というものは、すでに早くから注目されてきた事実であり、逆に交流があるということから直ちに相互の地域を一つの世界にできないことも、あらためて言うまでもない。このことはたとえば朝鮮半島と北九州地域との関係を歴史的に振り返れば明かであろう。また交流は縄文時代以来、長期に互っていることが多く、そうした長いスパンのなかで特定の時代を考える必要もある。北海道と本州との関係について言えば、比羅夫の時代になって突然交流が始まったわけではないのである。渡嶋問題について交流を根拠に考え

る場合には、以上の点を十分慎重に検討する必要がある。

さてこれまでも折に触れて指摘してきたように、余市町の大川遺跡や道央部石狩低地帯の末期古墳の遺物を例に、こうした地域の先進性・本州との深い交流関係を根拠として、本州からの比羅夫「北征」に登場する渡嶋を北海道と考えるのが、養島説③・樋口説③に代表されるような近年の通説的学説である。

ただし遺跡・遺物の年代観についてなお慎重に検討されるべきであろう。それらで列挙されている遺跡のなかには、比羅夫の時代以後のものも多い。交流の主体が八世紀以後における進展の成果と解釈できる余地も残されている。

さらにもう一つの大きな問題は、これまでの渡嶋＝北海道説ではほとんど考慮されてこなかった、北海道内の地域差の存在である。単に北海道と本州との交流というだけでは、この問題が看過されてしまう。交流の実態については、その主体と地域と時期的変遷とを慎重に考慮すべきであろう。⁽⁶⁷⁾

擦文文化の発生は、現在までのところ、前期の主要な遺跡が道央部に集中していることから、その地域に起源が求められている。右記したように養島説・樋口説も、道央の先進性を説くし、東北の末期古墳の副葬品と共通するような、擦文初期の遺物は道央から集中的に出土し、擦文初期のこの地域への本州からの移住すら想定されている。⁽⁶⁸⁾

しかしこのことは逆に、本州に近接した道南部との間に、質的差が存在することを意味する。続縄文文化について、道南・石狩・道北東の三分が想定され、擦文土器についても、特徴ある刻印によって、道南と道央との質的差が指摘されている。⁽⁶⁹⁾ また擦文土器の地域性について、縄文時代以来、大きく石狩低地帯を境に、本州との関連が強い道南と、大陸との関連が強い道東北とに分けられるという見方も提示されている。⁽⁷⁰⁾ またその縄文土器については、「津軽海峡よりも太平洋側の噴火湾と日

本海側の寿都湾を結んだ黒松内低地帯、この線より北側にある太平洋側の苫小牧市と日本海側の石狩湾を結ぶ石狩低地帯の二つの低地帯の存在が一応の境界線となっている」ともされる。⁽⁷¹⁾

当時の北海道側での主要な輸入品（毛皮との交易品）と目されている鉄器について見ると、近年の出土例の増加にともない、道央と道南とでどちらに比重をかけるかで、意見が分かれているようであるが、いずれにしる地域差は認められている。⁽⁷²⁾

やはり本州からの流入品である須恵器については、全道に分布しており、顕著な地域差は見出せないようである。⁽⁷³⁾

ちなみに大麦は、道央を境に北と南で別種であるという指摘がなされている。⁽⁷⁴⁾

こうした指摘を踏まえるならば、古代の北海道についても、おおむね道南・道央・道北東という三区分を前提にしてよいのではなからうか。これはちょうど中世北海道における、「渡党」「唐子」「日の本」といった地域区分に通じるものである。⁽⁷⁵⁾

さてこのように、擦文文化の中心である道央と道南との間に地域差が認められることと、本章（イ）で論じたように、津軽の北にはなお本州部分が残されていること、そしてその本州最北端部と道南部との間に共通の文化が広がっていることなどをあわせて考えれば、津軽の北に広がるのは、まさに「津軽海峡を挟む世界」であり、そのさらに北に広がる道央部とは区別する必要があるのではないか。⁽⁷⁶⁾そして旧稿で論じたように、この津軽の北に存在する「津軽海峡を挟む世界」こそ、渡嶋世界にふさわしいと今なお考える。⁽⁷⁷⁾そしてこの世界については、本格的な擦文世界である道央部とは区別して、擬似的な擦文世界と見做すことはできないであろうか。近年、青森県を本格的に擦文文化の世界と見做そうとする主張が注目されているが、それは以上のような観点から、津軽海峡沿岸部とそれ以南の内陸部とを区別し、津軽海峡沿岸部は道南と一体で、

さらに本格的な擦文世界である道央部とは区別するというように再構成した上で、積極的に継承していきたいと考える。⁽⁷⁹⁾既述したように、渡嶋「北海道説」でも、津軽と渡嶋との緊密かつ日常的な交流関係は繰り返し主張されてきたが、たとえば有間浜に渡来した渡嶋蝦夷にしろ、渡嶋津軽津司という呼称にしろ、これは以上のような地域区分を想定した方が十分説明できると思うのである。⁽⁸¹⁾

なお前章で触れたように、養島説⑥・若月説①など、近年の有力な説では渡嶋蝦夷を擦文集団と見做して議論が展開されているが、しかし渡嶋蝦夷を擦文集団とするのは、渡嶋を北海道であると断定した上での立論、いわば結果論の域をいまだ出していないのではなからうか。⁽⁸²⁾

（オ）オホーツク文化と肅慎

『日本書紀』にみえる肅慎については、従来、擦文文化期に道東部で展開された、北の海洋民文化であるオホーツク文化との関係が強く示唆されてきた。オホーツク文化が擦文文化とは異なって本州の文化と隔絶していることが、欽明天皇五年十二月紀にあるように「鬼魅」と呼ばれたり、斉明天皇六年紀「史料2」にあるようにかなり異様な風習をもつとされていることを説明しやすいからである。

しかし前章で触れたように、近年の学説では、肅慎を渡嶋蝦夷の一部と見做す説が唱えられるようになってきた。

早く若月「51」において、肅慎から蝦夷へという古代国家による概念認識の変化が生じたことが指摘されていたが、ほぼ同時期に執筆されていた熊田「54」では、本稿①で紹介したように、斉明六年紀「史料2」から渡嶋は肅慎の居住地でもあるとし、また持統十年紀「史料3」の「肅慎志良守」と宝龜十一年八月紀の「狄志良須」とに共通する「シラス」という訓から、渡嶋蝦夷に肅慎が含まれるなどとする、若月説と密接に関わる論点も提示されていた。

それ以後、関口「65」が、持統十年紀「史料3」を根拠に、やはり渡嶋蝦夷と肅慎との密接な関係を説き（五五〇頁）、若月「67」では、右記の熊田説を受けて、前章に若月説④として示したように、同じく持統十年紀「史料3」を、道南の渡嶋蝦夷と道北・道東の肅慎との共存のための整備を示すものと考え、そうした渡嶋蝦夷と共存する肅慎すなわち韃靼は、八世紀以後渡嶋と一括され渡嶋蝦夷・渡嶋狄と呼ばれるようになったとした。また樋口「69」も、持統十年紀「史料3」を根拠に同様な論を展開し、やはり熊田説を踏まえた上で、前章で樋口説⑤として示したように、オホーツク文化は本州との交流の痕跡がない以上、渡嶋蝦夷と交流する肅慎をオホーツク文化と結びつけることはできないとし、さらに渡嶋蝦夷と肅慎をともに含むものとして、蝦夷という用語が登場するのだとした。

まず持統十年紀「史料3」については、この一例のみで渡嶋蝦夷と肅慎との普遍的な交流を言えるのかという疑問が残るが、肅慎の一部にこうした動きがあったことは認めてよいであろう。また持統十年紀「史料3」の「肅慎志良守」と宝龜十一年八月紀の「狄志良須」との共通性から、捺文に肅慎が含まれるとする論点も、肅慎のすべてが、ということではなければ、十分容認できるものである⁽⁸³⁾。

従来の肅慎をオホーツク文化と結びつける説では、大陸との関係が重視されてきたわけであるが、じつは樋口説⁽⁸⁴⁾でも、一方で肅慎の多様性を強調しており、また従来の説を踏まえる養島説⁽⁸⁵⁾では、北方の多様な民族集団の存在を強調した上で、肅慎をオホーツク文化集団と定義している。

やはり渡嶋の北は肅慎の世界であり、そこには、オホーツク文化と関わるものも、渡嶋蝦夷と関わるものもいたのであろう。渡嶋よりさらに北の世界のことは、中央ではまだその詳細が明かではなく、日本側の史料に様々なものが肅慎として記録されたのかもしれない。

元慶の乱における渡嶋は、秋田・津軽との関係が深いし、一方で、肅慎の異様な風俗の存在も確かである。末期の蝦夷叛乱である天慶の乱では、賊徒が「異類」を率いてきたとあり、近年ではその「異類」を渡嶋であるとする説が多い⁽⁸⁶⁾。「異類」自体は、『日本三代実録』の書き方では蝦夷や俘囚のことであるが、次第に蝦夷よりも異民族の様相の強いものを指すようになっていった可能性は高い⁽⁸⁷⁾。そして渡嶋にそういうものが含まれるようになっていったことは、右記の近年の学説にある通りである。一方で、天暦元年の、最後の蝦夷叛乱とされる「狄坂丸の乱」の狄坂丸という人名は、狄のなかにも本州との交流の強いものが存在していた可能性を示唆している。

樋口説では、オホーツク文化と本州の文化との断絶が強調されるが、養島説⁽⁸⁸⁾にあるように、オホーツク文化集団と捺文文化集団との日常的な交流が想定できる以上、捺文文化集団を介しての本州との交流をまったく無視はできない。オホーツク文化にも本州系の遺物がまったくないわけではない。本州側の要求が強かった毛皮も、こうした多様な交流のなかで様々なルートを通じて入ってきたであろうし、既述したように、北海道側での重要な輸入品である鉄についても、大陸韃靼からも、本州からも、ともに流入してきたのではないか。渡嶋＝津軽海峡を挟む世界は、こうした本州と道央との物資の交流をつなぐ結節点にあったのである。

以上述べてきたことから明らかなように、このような多様な存在である肅慎こそ、「渡嶋＝津軽海峡を挟む世界」の外に広がる、道央や道東北をすべて含む世界であったのではなからうか。肅慎の一部が渡嶋夷に融合していったという事態も、こうした多様な肅慎のうち、道央部分の肅慎と考えたいのである。そしてその外には、肅慎の内、異民族としての要素の強い世界が広がっていたのである。繰り返し触れてきた、道央に本州との交流が強く認められるという論点も、そのなかにはこうした

肅慎世界の存在をも念頭に置いて検討する必要があると思う。

またこうした北海道における肅慎の在り方を考えるとき、千田〔64〕の紹介で既述した古地図（『行基菩薩説大日本国図』）にみえる「かりのみち（雁の道）」が、それと関わる可能性が高いと思う。「かりのみち」の説明として、異類異形のものが住む場所であると記載されているが（二四六頁）、それは右記した渡嶋と交わった肅慎についての「異類」表記と関係がある。また「かりのみち」は行基図では北に位置する島国（あるいは大陸の一部？）であり、蝦狄の狄も北方観念と関わる。北は出羽・佐渡とする伝統的な方位観が変化しつつあるのである。千田〔64〕では、「かりのみち」＝肅慎説の示唆にとどまり、他説の紹介も行っているが、本稿ではそれを積極的に継承していきたいと考える。

おわりに——渡嶋世界の消滅

「渡嶋」という呼称は、寛平五年（八九三）を最後に消える〔史料14〕。九世紀には、渡嶋がさらに北の世界との交流の結果、複雑な内部構成を取り始めたことを前章で論じたが、一〇世紀前後に、津軽海峡による本州と北海道の分断が顕著になることと関係するのではないか。⁽⁹²⁾ 渡嶋の本州部分はむしろ南の世界の内に含まれていくようである。⁽⁹³⁾

しかしそれは一時的なものであって、中世になると、この海峡を挟む世界は、ふたたび、その津軽海峡を北からも南からも「内海」と意識する一つの世界として復活している。⁽⁹⁴⁾

本稿では、こうした海峡を挟む世界という根強い伝統を踏まえて、渡嶋問題を再度考えてみた。当該地域についての限られた文献の解釈には限界があり、考古学の成果を積極的に解釈していかなければならないことは言うまでもないが、それについて門外漢故の誤解や情報摂取の遅れのあることをおそれる。

またアイヌ語地名と擦文文化の問題、アイヌ文化の成立との関係（この点については、時期的なずれの問題や、人種の問題と文化の問題などが複雑に関わる）などについてまで見通した検討も今後必要である。残された課題は多々あるが、現時点での覚書として、ここで擱筆したい。

〔付記〕本稿は、国立歴史民俗博物館特定研究グループの求めに応じて行った「阿倍比羅夫と渡嶋蝦夷—津軽十三湖の歴史—」（一九九二年十月十七日、於市浦村コミュニティセンター）及び縄文文化検討会の求めに応じて行った「文献上から見た古代蝦夷像—「蝦夷」表記の成立期を中心に—」（第五回縄文文化検討会シンポジウム「北日本縄文文化の実像—古代蝦夷の成立と展開に関する諸問題—」一九九四年三月二十六日、於青森県埋蔵文化財調査センター）の二つの口頭報告をもとに、その後の知見を交えて再構成したものである。それらの席上にて、種々ご教示いただいた諸先生方に末尾ながら謝意を表します。

註

- (1) 拙稿〔62〕（渡嶋問題に関する主要な研究論文については、本稿末に文献目録を掲げたので、それを参照されたい。本稿では、この表に掲載した論文については、すべてその番号で示す。本稿で旧稿というのは、すべてこれをさす。なお当時の私見の梗概は、それに先だって「古代蝦夷の時代」（盛田稔・長谷川成一編『図説青森県の歴史』河出書房新社、一九九二年）において述べたことがある。
- (2) たとえば養島〔68〕（二九頁）など。
- (3) 熊谷〔53〕他参照。
- (4) 新井白石の東北史研究については、宮崎〔44〕に詳しい紹介があるので参照されたい。そこにあるように、白石には『蝦夷志』以外にも、『説史余論』『本朝軍器考』といった著作に、関連する記述がある。
- (5) 津田〔14〕は、その補記で、林説について学問的根拠のない説であるとはするものの、それに注目している。ちなみに菅江真澄『筆のまにまに』にも、後方半路を津軽の岩木山とする説がみえる。なお初期の白石批判としては、宮崎〔44〕にあるように、考証学者猪飼敬所のそれにも注目できる。
- (6) 近世に早くも蝦夷即アイヌ説が誕生していたことに、杉山〔38〕は注目してい

- る。
- (7) 大正期以前の研究史については、児玉「34」(本稿では、とくに註記しない限り「北方文化研究」の頁を示す。九八頁以下)・杉山「38」(二七頁以下)・北構「61」(二七五頁以下)などに、的確にまとめられており、とくにさらに付け加える必要は感じられないので、詳細はそちらを参照されたい。また昭和期以後の研究でも、明確な史料考証のなされていないものについては、本稿ではふれず、研究史の意味についてはやはりそれらのまゝに譲ることとする。
- (8) 「渡嶋」関係史料については、本稿末に表にまとめた。本稿ではそれらの史料については、その表の番号によって示すこととする。
- (9) 本稿での引用に際しては、『日本古典の研究』の頁数を示す。
- (10) 後にも触れるが、津田は、斉明五年紀所引伊吉連博徳書の「都加留」を、津輕を含む広域地名であると解している。
- (11) 松原「45」は、「志摩国」(持統六年三月紀)・「嶋宮」(天武元年九月紀)・「磯城嶋」(欽明元年七月紀)・「高嶋郡」(継体即位前紀)を挙げる。またとくに東北地方では、中世の郡制下で、「嶋(島)」という単位が多いことにも注目される。「小鹿島」などが参考になろう。
- (12) 高橋「30」(七八頁)では津田説を一応肯定する。しかし後に高橋「32」では、比羅夫自身は北海道まで渡ってはいないが、渡嶋自体は北海道と見る説に変わった(四九頁)。
- (13) 児玉「34」が指摘するように、「渡嶋の津輕」は養老四年紀「史料5」にみえるものであるから、ここに例示するのは誤りである。
- (14) 松原は、斉明紀の史料批判について、斉明四年四月紀「史料1」と斉明五年三月紀を同事重出記事と見る坂本「23」の説に従っている。
- (15) 史料3については、田名網「24」では「越の国から渡ってける島の意」としていた。
- (16) 田名網「20」では、後方羊蹄を青森付近の松森村の「しりべち」に比定する説も紹介されている(一八頁)。しかしこれは田名網自身が賛同しているわけではないし、児玉「34」の言うとおりまず無理であろう。
- (17) この部分だけは田名網「24」の論点。
- (18) 田名網は古田良一「津輕十三湊の研究」(東北大学文学部研究年報七、一九五六)を参考している。もっとも古田氏自身が認めているように、深浦説に確たる根拠があるわけではない。
- (19) 古代蝦夷がアイヌであるかどうかという点については、近年の埴原和郎氏らの一連の見解によって、現在では、形質人類学的にはそういう問題の立て方自体がおかしいとされているので、本稿では触れないこととする。
- なお児玉は、このことがエミシと区別されたエゾの誕生と関わると見ている。
- (20) 津田説を批判する瀧川が、斉明五年紀の諸蝦夷を渡嶋蝦夷としているのはおかしいと批判している(一二二頁以下)。また坂本「23」についても、斉明六年紀「史料2」の解釈の問題から批判している(一二六頁以下)。
- (21) 児玉はさらに斉明五年紀所引伊吉連博徳書の記載から、津輕が陸奥に含まれることを論じるが(一三三頁)、この点は史料解釈として明らかに誤りである。
- (22) 近世津輕にアイヌ居住の明証があることも議論している(一二二頁以下)。
- (23) 田名網「28」は「渡嶋蝦夷等」であって「渡嶋等蝦夷」ではないので、渡嶋からだけ来たのであり、北海道だけからわざわざ呼ぶとは思えないとしていた(六二頁)。いずれにしろ古代史料における「等」の使い方はそれほど厳密ではない。
- (24) 熊谷には、この論文の前提として、「阿倍比羅夫北征記事の研究史的検討」(東北学院大学論集「歴史学・地理学」一六、一九八六年)がある。
- (25) 早く高橋「32」が、啓蒙書なので詳しくは述べられてはいないものの、「鰐田・淳代・津輕と渡嶋とは地域的に区別されている」と明言していた(四九頁)。
- (26) 森田「59」もこのことを再論している(一五五頁)。
- (27) 前掲註(10)参照。これについて児玉は、「こういうことは斉明紀のどこにも書かれていない」(34)「一九九頁」としている。
- (28) 宮崎「44」では「田名網氏の渡嶋説が必ずしも津田説の忠実な継承とは認められないことと、その白石説批判には誤解がある」(四二頁)としている。
- (29) 熊田「54」註(97)。範囲が狭まってくいというのはいかにも不自然な解釈であるとしてもいい。
- (30) ただ児玉が傍証とした斉明元年七月紀の解釈については検討の余地がある。
- (31) 津田「14」・瀧川「27」では「渡嶋蝦夷」の誤り、村尾「22」では、陸奥側にも警戒部隊が配備されたものとされ、田名網「28」では「漠然と淳代辺を指したものの」、新野「46」では「津輕地方の現地の人間」、関口「50」では、前年の鰐田・淳代・津輕などの帰服によって、それが陸奥国司の管轄下に組み込まれたとし、石附「52」では「鰐田・淳代・津輕等の各蝦夷の総称的なもの」などとしている。
- その他、川副武胤「四方国考(上)」「(下)」『古事記』国県邑里考のうち「(東アジアの古代文化二二)」「二四、一九八〇年」・同「統四方国考二題」(弘前大学国史研究七〇、一九八〇年)・同「四方国追考(上)」「(下)」『甲斐之酒折宮一』(東アジアの古代文化二六、二七、一九八一年)(以上、すべて川副『日本古典の研究』所収)、佐藤和彦「斉明朝の北方遠征記事について」(歴史五七、一九八一年)でも取り上げられ、それをめぐっては、熊谷「53」・熊田「54」・北構「61」・養島「66」などの間で論争がある。
- (32) 熊谷「53」註(33)では、地域名として使用された例として、史料2B・史料5を挙げているが、史料11も追加できる。

なお渡嶋が本拠地にちなむ民族名だとすると、本拠地を追われればどうなるのか、という疑問もあるが、これは本拠地を追われたとしても、遺称は残ると考えてよからう。

- (33) 日本古典文学大系『日本書紀』(下) 五七七頁補注二。
- (34) 児玉「34」(一二四頁)では、児玉説②Aの立場から、村尾説の矛盾点的確に指摘されている。
- (35) 関口「50」では瀧川説①の解釈に従うべきだとしているが、本稿では、熊谷説の立場を支持する。
- (36) 渡部「49」四二頁以下。その他斉明六年紀「史料2」で、陸奥蝦夷を兵力として載せていくとあるが、松原説にいう渡嶋⇨米代川周辺では南すぎて、かれらを率いることができないとも批判しているが、これは先に触れた「陸奥」の解釈が関わるところである。さらに松原説のように北上でなく南下とは解釈できないし、元慶紀についても松原の解釈には従えないとしている。
- (37) 熊谷「53」註(32)。さらに元慶の乱の動向を見ると、米代川流域の蝦夷と渡嶋蝦夷とは別であることも根拠として挙げている。後に森田「59」でも、同様の根拠から松原説が否定されている(一五六頁)。
- (38) その他、新野は『古代東北の開拓』(瑞書房、一九六九年)・『古代東北史の基本的研究』(角川書店、一九八六年)などの多数の著書でも、北海道説を結論的に述べている。ただ新野「46」では、渡嶋が北海道かいないかは分からず、あるいは佐渡かもしれないと述べたことがある(六頁以下)。
- (39) 野代湊のように「賊地」ではなく「夷地」と表記されているので、これは当時もおお朝貢関係を維持していた渡嶋の内であろうと言う。
- (40) ただ後方羊蹄などは、現在地名が残っていないわけで、消えた地名がたくさんあることが明らかである以上、関口説のように即断はできないであろう。
- (41) この点については、直接は若月「51」に対して向けられたものではあるが、養島「66」(五二八頁)の批判がある。
- (42) ただしこの点は、さらに検討が必要である。
- (43) 養島は北構「61」(一四七頁)を引用しているが、本稿⑤で既述したように、これは瀧川説①以来の論点である。
- (44) 若月には、当該期の分析をめぐって、若月「51 56」といったそれに先行する見解があるが、この若月「67」でそれを大幅に改めている。
- (45) この点は、本稿①でふれた熊田「54」での理解を踏まえてのものである。
- (46) 後半はやや意味がとりにくいが、あるいは次章で触れる杉山莊介説⑤のように、アイヌ語地名だから北海道という説であろうか。もっとも津軽自身、これはアイヌ語地名である可能性が高い。
- (47) 若月だけは独特の史料批判を行ない、係年が異なる。また以下の視点のなかに

は、部分的には早くから論じられていた視点・事柄ももちろん含まれている。

(48) 児玉説については既述。北構説については、「61」(一八一頁以下)参照。

(49) こうした観点自体は、すでに高橋「32」(四九頁)や郷土史家などの間でも指摘されていた。

- (50) ちなみに石附「41」もこの説を採っている。
- (51) ただし貞観十七年紀「史料9」は、本州北部とみる。
- (52) 前掲註(37)参照。
- (53) 若月旧説「51」批判については、奥田尚「斉明朝における阿倍比羅夫の北進について」(『今井林太郎先生喜寿記念国史学論集』同論集刊行会、一九八八年)、養島「66」などを参照のこと。
- (54) 児玉「36」も瀧川説を全面的に支持している(七三頁)。
- (55) 北構「61」(一四六頁以下)、樋口「69」註(5)などに研究史がまとめられている。
- (56) 註(18)前掲論文。
- (57) 児玉「36」(七六頁以下)参照。その批判は的確であった。ただそれ以後の研究でも、井上「39」、虎尾俊哉「律令国家と蝦夷」(『若い世代と語る日本の歴史二〇』、評論社、一九七五年)など、津田説に従う研究は多い。
- (58) 熊谷「53」註(36)他参照。
- (59) もちろん「拾芥抄」行基図の「夷地」はいろんな解釈が可能であり、中世津軽安藤氏の主要拠点の一つであった下北地域をそこに想定することも可能である。それに対して、千田「64」などで注目されている、「かりのみち」こそ、本州とは別の島であるから、肅慎と関わる北海道ではなからうか。もちろんあるいは大陸の一部かもしれないが、この点については、本章(オ)でもう一度触れたい。
- (60) 「千疋」の「千」については、古来数が多すぎるとして、「二十」の誤写と見る説も多くある。
- (61) 民族名といっても、これは和語である。あるいは蝦夷のなかで海を盛んに利用するものに対して付けられた汎称なのかもしれない。渡嶋蝦夷が海と関わりが深いことは、関口「65」でも、弘仁元年紀「史料8」を例に引いて触れられている(五四一頁)。
- (62) 本稿の一部を発表した「第五回縄文文化検討会シンポジウム」の席上でも、菊池徹夫氏より同様の教示をいただいた。
- (63) その根拠として、『続日本紀』以降では、日本海側のエミシは「蝦狄」などと表現されるということを挙げているが、基本的にはその通りであるにしろ、「陸奥羽蝦夷」という表記ならば、霊亀元年正月紀・宝龜三年正月紀など、かなり例がある。
- (64) 北海道に限らず、東北北部で出土する馬具については、たしかに形状的には長

野馬などで出土する馬具と酷似するものがあるが、北方地域で現実にそれが馬具として使用されていたかどうかについては、慎重に扱う必要もあろう。交流の成果として入手しても、装飾品などとして利用された可能性を念頭に置く必要がある。

なお、北海道における馬の存否の問題は、飼料としての塩の問題も念頭おく必要がある。古代の北海道では塩も陸奥湾沿岸沿いの製品に依存せざるをえなかった。

- (65) 児玉「34」では、「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語第十二」(『今昔物語集』第三十一)にみえる胡国の馬の史料について、検討を保留しているが、この史料は、当時の観念としては注目すべきものである。

- (66) 余市町フゴッペ洞窟付近の鉄製武器を副葬する七世紀中葉の土墳墓に注目し、本州からの兵士集団の到来を想定する説(大沼忠春「北海道の文化」金子裕之編『古代史復原』9古代の都と村、講談社、一九八九年)を支持している。

- (67) 坂井秀弥「北海道出土「佐渡小泊産須恵器」の問題点」(新潟考古学談話会報一三、一九九四年)二六頁参照。

- (68) 鈴木靖民「古代蝦夷の世界と交流」(同編『古代蝦夷の世界と交流』古代王権と交流一、名著出版、一九九六年)一七頁。

なお斉藤利男「蝦夷社会の交流と「エゾ」世界への変容」(前掲『古代蝦夷の世界と交流』)では、道央部の末期古墳についての評価をかなり低く見ている(四四六頁)。

- (69) 横山英介「擦文文化」(考古学ライブラリー59、ニュー・サイエンス社、一九九〇年)三六頁以下など。また本州との関係が深い恵山式と、それとは質的に異なる道央部の続縄文といった構図も指摘されている。宇田川洋「北海道の考古学」(北方新書一、北海道出版企画センター、一九九五年)一八二頁以下。

- (70) 越田賢一郎「擦文土器の終焉(下)」(中世土器研究七四、一九九四年)。また縄文時代以来の青森と渡島半島南端部との交流については、近年発見されたストーンサークルなども注目される。

- (71) 羽賀憲二「二つの文化系統」(坪井清足他編『新版古代の日本』⑨東北・北海道、角川書店、一九九二年)四〇五頁。

- (72) 横山前掲註(69)書では、北海道における石器と鉄器の関係について、渡島半島部や噴火湾沿岸部でもっとも早く(擦文文化初期期(68))に鉄器化が完了し、ついで石狩低地へ普及していったという(一一三頁)。養島(三三三頁)・鈴木註(68)前掲論文(二七頁)などでは、道央の卓越性が説かれている。

- (73) 山本哲也「擦文文化に於ける須恵器について」(國學院大学考古学資料館紀要四、一九八八年)五頁以下参照。

- (74) 「北の古代史をさぐる―擦文文化―」(北海道開拓記念館第四五回特別展図録、

一九九八年)。

- (75) 中世土器については、渡島半島南端部と、それを除く道南部、道央部といった地域区分が顕著にみられるという(越田賢一郎・鈴木信「北海道」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、一九九五年)。

- (76) もちろん、私の言う「津軽海峡を挟む世界」について、南北にもっと大胆に広げれば、秋田・津軽を含む海峡世界―道央という三区に分なるわけであるが、そこまで拡大するのは無理である。

- (77) 児玉「36」が「明治前日本人類学・先史学史」に再録された際に新たに挿入された地図に概念的に示された渡嶋世界(七六頁)は、結果的には私の説くところにきわめて近いものとなっている。

- (78) 三浦圭介「安藤氏台頭以前の津軽・北海道」(国立歴史民俗博物館編『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社、一九九四年)他、三浦の一連の論考参照。

- (79) この点については拙稿「防衛性集落の時代をどうみるか―南からの力・北からの力 古代文献史学の側からの試論―」(人間宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内外世界―北奥羽・蝦夷・島と地域諸集団』山川出版社、一九九九年)でも触れている。

- (80) 熊谷「53」・養島「66」他。

- (81) 平山久夫「47」も、短文であるために論旨は不明確であるが、渡嶋文化圏の伝統という立場から、海峡を挟む交流について盛んに論じているので、渡嶋を、海峡を挟む世界と関係付けて論じる意志を強く有しているものと思われる。

- (82) 若月説①については、擦文の発生を道央と見る説と抵触するのではなからうか。もつとも若月説では、道央部についてはとくに触れられていない。

- (83) ただ樋口説で、肅慎と渡嶋蝦夷と、両方の表記が同時に消えていき、蝦夷になつていくという論点は、なお検討の余地がある。養老二年紀「史料4」の「渡嶋蝦夷」の問題の他に、元慶三年紀でも「渡嶋蝦夷」とあって「渡嶋狄首」ではないといった点についても、なお検討が必要であらう。

- (84) 樋口「69」註(36)など。

- (85) 「当時の北方における複雑な民族構成」を指摘する(養島「66」五二七頁)。

- (86) 新野直吉「古代東北の兵乱」(日本歴史叢書四一、吉川弘文館、一九八九年)、菅田慶信「安倍氏・清原氏・藤原氏」(註(71)前掲『新版古代の日本』⑨東北・北海道、斉藤註(68)前掲論文。ただし菅田が「秋田城に押し寄せた狄」とするのは、表記の点から気にかかる。また斉藤は、新野・菅田説を、渡嶋北海道説から解釈し、「異類」を北海道の人々とする。

- (87) 関口明「八、九世紀における移配蝦夷の実態」(日本歴史三五七、一九七八年)が、九世紀以降、俘囚・夷俘・蝦夷といった呼称上の違いがいまいになるとしていることも関係しようか。

(88) 袁島「66」五一四頁他参照。

(89) 関口「65」五四八頁他参照。

(90) 伝統的な肅慎解釈の系譜上にある森田説④も、こうした解釈に立てば、私の考えとさほど矛盾するものではない。ただし既述したように、それをストレートにアイヌにつなげるのは問題である。

(91) 詳細は拙稿「日本古代・中世における境界観念の変遷をめぐる覚書―古典籍・古文書に見える「北」と「東」―」（皆川完一編『古代中世史科学研究』下、吉川弘文館、一九九八年）参照。また『尊卑分脉』（法成寺関白道長公次男堀河右大臣頼宗公孫）の鎮守府將軍藤原基頼の項に「討出羽常陸北国凶賊」とある北の方位観念もこうした変化の内に登場したものであろう。

(92) 岡田淳子「北海道にみる本州古代文化の射影―土師器研究を基礎として―」（『論集日本原史』吉川弘文館、一九八五年）では、「西暦九〇〇年代の比較的早い頃」（六九四頁）、同「流通拠点―余市大川」（『北方文化と日本列島』クパプロ、一九九六年）では、「二〇世紀末になると、本州と北海道との往来が途絶えがちとなり」（二七頁）とある。また山本註（73）前掲論文四二頁参照。

(93) 三浦註（78）前掲論文などでは、九世紀初めの津軽海峡による本州と北海道との分断が説かれている。この点については、今後さらに検討を進めていきたい。

(94) 拙稿「中世の奥羽と北海道」（『白い国の詩五〇九、一九九九年』参照）。

(95) 渡嶋消滅以後の歴史については拙稿註（79）前掲論文で、その概観を論じている。

〔補註〕 脱稿後、樋口知志「古代辺境における人的交流」（『人間・社会・文化』岩手大学、一九九七）・同「安倍氏の時代」（『岩手史学研究八〇、一九九七』）に接した。本稿と関わる論点が再論されている。併読を請う次第である。

（法政大学第一教養部、国立歴史民俗博物館特定研究協力者）

（一九九九年七月六日 審査終了受理）

文 献 目 録

番号	執筆者	論文名	掲載誌等	巻号	特集	刊行年月	出版社	所収・再録書名	改題・改稿
1	新井 白石		『蝦夷志』			1720/			
2	林 子平		『三国通覧図説』			1785/			
3	本居 宣長		『古事記伝』	27	日代宮二之巻	1790/		全集11	
4	山田 聯		『北裔備考』			1811/			
5	飯田 武郷		『日本書紀通釈』			1892/01			
6	沼田 頼輔	阿倍比羅夫の征したる肅慎国に就て	歴史地理	1-3		1899/12			
7	吉田 東伍		『大日本地名辞書』	5 下	奥羽（下）	1907/08	富山房		
8	吉田 東伍		『大日本地名辞書』	統編	北海道・樺太・琉球・台湾篇	1909/12	富山房		
9	吉田 東伍	蝦夷島の古名	歴史地理	14-1		1909/07			
10	白鳥 庫吉	肅慎考	歴史地理	17-1		1911/01		全集 4	
11	岡部 簾月	簾月史話	歴史地理	18-2		1911/08			
12	河野 常吉		『北海道史』	第一		1918/12	北海道庁		
13	鳥居 龍蔵	（蝦夷におけるツングースの遺跡）	東京帝国大学理科大学紀要	42-1		1919/01		全集 5	
14	津田 左右吉	肅慎考（上）（下）	文学思想研究	2-3		1925/11 1926/06		日本上代史の研究 日本古典の研究 下 全集 2	
15	丸山 二郎	斉明紀における阿部臣の北進について	史学雑誌	38-11		1927/11		日本の古典籍と古代史	
16	喜田 貞吉	奈良時代前後に於ける北海道の経営（上）～（下）	歴史地理	62-4～6		1933/10-12		著作集 9	
17	喜田 貞吉	本邦古代に於ける北地との海上交通	交通文化	5		1939/01			
18	菊池 山哉	序論（体質学上の日本石器時代人種 毛人と毛人国） 渡島の狄（民俗学上のアイヌ族 アイヌ人種の先祖 肅慎とアイヌ人 縄紋土器と古墳）	多麻史談	15-4・5		1947/10		蝦夷と天ノ朝の研究 蝦夷とアイヌ	
19	瀧川 政次郎	斉明朝における東北経略 —特に斉明紀に見える地名について	『余市』地方史研究所編			1953/11	余市郷土史研究会		
20	田名網 宏	阿部比羅夫の渡島遠征について	日本歴史	66		1953/11			
21	河野 広道	阿倍臣の「後方羊蹄」はどこか	『苫小牧地方古代史』			1954/03		続々北方文化論（河野広道著作集Ⅲ）	
22	村尾 次郎	渡島と日高見国	芸林	5-3		1954/06		律令財政史の研究	奥羽政策の物語的前史
23	坂本 太郎	日本書紀と蝦夷	『蝦夷』（古代史研究第二集）古代史談話会編			1956/05	朝倉書店	日本古代史の基礎的研究・上 著作集 2	
24	田名網 宏	古代蝦夷とアイヌ	『蝦夷』（古代史研究第二集）古代史談話会編			1956/05	朝倉書店		

25	大山 梓	渡島蝦夷	陸奥史談	25		1956/05			
26	室賀 信夫	阿倍比羅夫北征考	史林	39-5		1956/09		古地図抄	
27	瀧川 政次郎	斉明朝における東北経略補考	史学雑誌	67-2		1958/02			
28	田名網 宏	斉明紀「渡島」再論 —滝川博士の批判に答える—	史学雑誌	67-11		1958/11			
29	虎尾 俊哉	瀧川政次郎氏「斉明朝における東北経略補考」(史学雑誌六七-二) 田名網宏氏「斉明紀『渡島』再論—瀧川博士の批判に答える—」(同誌六七-一一)	弘前大学国学研究	18		1959/08			
30	高橋 富雄	蝦夷征伐	『蝦夷』日本歴史叢書			1963/10	吉川弘文館		
31	直木 孝次郎	蝦夷征討と百済救援	『日本の歴史』	2	古代国家の成立	1965/03	中央公論社		
32	高橋 富雄	蝦夷(えみし)	『みちのくの世界—文化史的考察—』角川新書204			1965/08	角川書店		
33	杉山 莊平	阿倍臣比羅夫肅慎征討考	海事史研究	8		1967/04			
34	児玉作左衛門	阿倍臣比羅夫の渡島遠征に関する諸問題 I 渡島蝦夷と陸奥蝦夷	北方文化研究	3		1968/03		明治前日本人類学・先史学史—アイヌ民族史の研究(黎明期)—	(第1章)
35	新野 直吉	7世紀後半の西奥羽情勢	北奥古代文化	1		1968/04			
36	児玉作左衛門	阿倍臣比羅夫の渡島遠征に関する諸問題 II 阿倍臣の北進 III 阿倍臣の肅慎征討	北方文化研究	4		1970/03		明治前日本人類学・先史学史—アイヌ民族史の研究(黎明期)—	(第1章)
37	児玉作左衛門	古文獻に現われた渡島蝦夷・蝦夷とアイヌ民族(斉明朝より天正まで)	『明治前日本人類学史・先史学史—アイヌ民族史の研究(黎明期)—』明治前日本科学史刊行会編			1971/03	日本学術振興会		
38	杉山 莊平	渡島考	史観	83		1971/03			
39	井上 光貞	阿倍比羅夫の東北経営	『日本の歴史』	3	飛鳥の朝廷	1974/01	小学館		
40	浅井 亨 石附 喜三男 大林 太良 桜井 清彦 佐々木 昌雄 田村 すゞ子 新野 直吉 水島 義治 山田 秀三 鈴木 武樹 (司会) 江上 波夫	シンポジウム「北方の古代文化」	『北方の古代文化』新野直吉 山田秀三編			1974/07	毎日新聞社		

番号	執筆者	論文名	掲載誌等	巻号	特集	刊行年月	出版社	所収・再録書名	改題・改稿
41	石附 喜三男	阿倍比羅夫遠征の北限	歴史と人物	7-11	埋もれた日本古代の謎	1977/11			
42	石附 喜三男	考古学からみた『肅慎（みしはせ）』	『蝦夷』日本古代文化の探究(大林太良編)			1979/09	社会思想社	アイヌ文化の源流	
43	新野 直吉	古代史上の津軽	弘前大学国史研究	70		1980/04			
44	宮崎 道生	新井白石と津軽史	弘前大学国史研究	70		1980/04			
45	松原 弘宣	渡嶋津軽津司について	愛媛大学教養部紀要	13		1980/12		日本古代水上交通史の研究	
46	新野 直吉	古代交易史上の日本海岸北部	『日本海地域史研究』	2		1981/02	文献出版		
47	平山 久夫	渡嶋蝦夷及渡嶋文化圏	北奥古代文化	14		1983/11			
48	高瀬 重雄	越の国と蝦夷および肅慎	『日本海文化の形成』 高瀬重雄文化史論集Ⅱ			1984/06	名著出版		
49	渡部 育子	律令制下の海上交通と出羽—古代出羽における海上交通の意義をめぐって	『日本海地域史研究』	7	新野直吉博士還暦記念論文集	1985/07	文献出版		
50	関口 明	北海道式古墳と渡嶋蝦夷	古代文化	37-7		1985/07		蝦夷と古代国家	蝦夷問題と北海道—～三
51	若月 義小	律令国家形成期の東北経営—その実態と性質	日本史研究	276		1985/08			
52	石附 喜三男	北海道考古学からみた蝦夷（エミシ）	古代文化	38-2	古代蝦夷（エミシ）小特集	1986/02		アイヌ文化の源流	
53	熊谷 公男	阿倍比羅夫北征記事に関する基礎的考察	『東北古代史の研究』 高橋富雄編			1986/10	吉川弘文館		
54	熊田 亮介	蝦夷と蝦狄—古代の北方問題についての覚書	『古代東北史の研究』 高橋富雄編			1986/10	吉川弘文館		
55	関口 明	渡嶋蝦夷と毛皮交易	『日本古代中世史論考』 佐伯有清編			1987/03	吉川弘文館		
56	若月 義小	古代北方史研究の課題—東北アジア史における日本古代国家の位置をめぐって	新しい歴史学のために	188		1987/09			
57	小林 恵子	斉明朝の肅慎と渡嶋について	古代日本海文化	12		1988/06			
58	中村 英重	渡嶋蝦夷の朝貢と交易	『古代の東北—歴史と民俗—』木本好信編			1989/05	高科書店		
59	森田 悌	古代東北と舟運	『古代の東北—歴史と民俗—』木本好信編			1989/05	高科書店	日本古代交通社会史考	
60	熊田 亮介	古代における「北方」について	『古代の東北—歴史と民俗—』木本好信編			1989/05	高科書店		
61	北構 保男	斉明朝における阿倍臣船師の北征と蝦夷社会 渡嶋蝦夷について 総括	『古代蝦夷の研究』			1991/06	雄山閣出版		

62	小口 雅史	阿倍比羅夫北征地名考 —渡嶋を中心として	文経論叢	27-3		1992/03		日本文化史論叢	
63	関口 明	阿倍比羅夫の遠征とその意義	『蝦夷と古代国家』古 代史研究選書			1992/09	吉川弘文館		
64	千田 稔	行基図と北辺の発見 —飛鳥から肅慎への道	『エミシとは何か—古 代東アジアと北方日 本』中西進編			1993/11	角川書店	風景の考古学	飛鳥からみた北辺
65	関口 明	渡嶋蝦夷と肅慎・渤海	『日本古代の伝承と東 アジア』佐伯有清先生 古稀記念会編	70		1995/03	吉川弘文館		
66	蓑島 栄紀	阿倍比羅夫の北征と東北アジア世界	『日本古代の伝承と東 アジア』佐伯有清先生 古稀記念会編			1995/03	吉川弘文館		
67	若月 義小	北東アジア国際関係史における列島北 部地域の実像—7・8世紀を中心に	京都経済短期大学論集	3-2		1996/03			
68	蓑島 栄紀	古代北海道における「肅慎」と「渡嶋 蝦夷」	歴史評論	555	列島古代の民 族・国境・交通	1996/07			
69	樋口 知志	渡島のエミシ	『古代王権と交流』鈴 木靖民編	1	古代蝦夷の世界 と交流	1996/09	名著出版		

「渡嶋」關係史料一覽

番 号	史 料 名	年 号	年	月	閏	日	西曆	本 文
1	日本書紀	齊明天皇	4	4			658	夏四月阿陪臣、(闕名。)率船師一百八十艘伐蝦夷。齋田・淳代二郡蝦夷望怖乞降。於是勒軍陳船於齋田浦。齋田蝦夷恩荷進而誓曰。不爲官軍故持弓矢。但奴等性食肉故持。若爲官軍以儲弓矢、齋田浦神知矣。將清白心仕官朝矣。仍授恩荷以小乙上。定淳代・津輕二郡々領。遂於有間濱召聚渡嶋蝦夷等大饗而歸。
2 A・2 B*	日本書紀	齊明天皇	6	3			660	三月。遣阿倍臣、(闕名。)率船師二百艘伐肅慎國。阿倍臣以陸奧蝦夷令乘已船到大河側。於是渡嶋蝦夷一千餘屯聚海畔、向河而營。々中二人進而急叫曰。肅慎船師多來將殺我等之故、願欲濟河而仕官矣。阿倍臣遣船喚至兩箇蝦夷、問賊隱所與其船數。兩箇蝦夷便指隱所曰。船廿餘艘。即遣使喚而不肯來。阿倍臣乃積綵帛・兵・鐵等於海畔而令貪嗜。肅慎乃陳船師、繫羽於木、舉而爲旗。齊棹近來停於淺處。從一船裏出二老翁、廻行熟視所積綵帛等物。便換著單衫、各提布一端、乘船還去。俄而老翁更來脫置換衫、并置提布、乘船而退。阿倍臣遣數船使喚。不肯來、復於弊路辨嶋。食頃乞和。遂不肯聽。(弊路辨、渡嶋之別也。)據已柵戰。于時能登臣馬身龍爲敵被殺。猶戰未倦之間、賊破殺已妻子。
3	日本書紀	持統天皇	10	3		12	696	賜越度嶋蝦夷伊奈理武志、與肅慎志良守觀草、錦袍袴・緋紺繩・斧等。
4	扶桑略記	養老	2	8		14	718	出羽并渡嶋蝦夷八十七人來。貢馬千疋。則授位祿。
5	統日本紀	養老	4	1		23	720	遣渡嶋津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國、觀其風俗。
6	統日本紀	宝龜	11	5		11	780	勅出羽國曰。渡嶋蝦狄早効丹心、來朝貢獻。爲日稍久。方今歸作逆、侵擾邊民。宜將軍國司賜饗之日、存意慰喻焉。
7	類聚三代格	延曆	21	6		24	802	太政官符 禁斷私交易狄土物事 右被右大臣宣偏。渡嶋狄等來朝之日、所貢方物、例以雜皮。而王臣諸家競買好皮、所殘惡物以擬進官。仍先下符禁制已久。而出羽國司寬縱曾不遵奉、爲吏之道豈合如此。自今以後、嚴加禁斷。如違此制、必處重科。事緣勅語。不得重犯。延曆廿一年六月廿四(六)日 [cf 逸史は二十六日]
8	日本後紀	弘仁	1	10		27	810	陸奧國言。渡島狄二百餘人來着部下氣仙郡。非當國所管、令之歸去。狄等云。時是寒節、海路難越。願候來春、欲歸本鄉者。許之。留住之間、宜給衣糧。
9	日本三代実録	貞觀	17	11		16	875	出羽國言。渡嶋荒狄反叛。水軍八十艘、殺略秋田・飽海兩郡百姓廿一人。勅牧宰討平之。
10	日本三代実録	元慶	2	9		5	878	勅符出羽國司曰。得八月廿三日奏狀、具知消息。初所以遣春風等發精兵者、爲赴彼國之急。而今來奏以爲、賊氣已衰、官軍思舊。重之迎軍運糧、爲煩不細。因茲論之、春風等之前却、在彼國之強弱耳。量勢施計、不得適度。若當國之力、足以制賊者、移告而返之、不可必迎引。且津輕渡嶋俘囚等、所請之事、以夷擊夷、古之上計。但野心難馴、動靜易變。偶生他意、後恐難制。宜量事勢、隨便進止。至于饗會狄俘、非事之意(急)者也。若弥盡賊徒、勞賜不晚。今舉城燒亡、無處會聚。但拔有功者、加其賞賜、足以勸勵戎士。何必大饗、更致騷動乎。且其殺獲生禽、頗知破賊。弥以勉勵、速成大功。州書類奏、驛使屢馳。務施平寇之策、莫以延引歲月。
11	藤原保則伝	元慶	2				878	自津輕至渡嶋、雜種夷人、前代未曾帰附者、皆尽内属。於是公復立秋田城。凡厥壘柵樓塹、皆倍旧制。
12	日本三代実録	元慶	3	1		11	879	出羽國飛驒奏言。去年十二月十日、凶賊悔返噬之過、致束手之請。便返進所略奪之甲廿二領言曰。所取甲冑。其數不少。任已狂心。皆悉載破。稱身約載。一无全者。加之、賊類或入奥地、或所居隔遠。其遣甲冑、搜求追進。於是、正六位上行左衛門權少尉兼權掾清原真人令望。左馬權大允正七位下藤原朝臣滋實。右近衛將曹兼權大目從七位上茨田連貞額等進議曰。今乞降之賊二百人。所進之甲廿有餘、賊黨多數、官甲冑已少。野心難測。疑是矯飾。須待後進、一度計納。陸奥鎮守將軍從五位下小野朝臣春風議曰。春風自入賊地、具知逆類悔過之心。今亦蒙犯霜雪、乞降懇切。若懷疑虜、抑而不納、猶去逸就勞、非所以樂成。正五位下守右中弁兼行權守藤原朝臣保則等商量。雖令望之議、已有道理、而春風之謀、非无便宜。故殊加慰納、緩其嚴誅。亦渡嶋夷首百三人、率種類三千人、詣秋田城。與津輕俘囚不連賊者百餘人、同共歸慕聖化。若不勞賜、恐生怨恨。由是、遣從五位下行權介藤原朝臣統行・從五位下行權掾文室真人有房及令望・滋實・貞額等勞饗。
13	日本三代実録	元慶	5	8		14	881	先是、出羽國司言。去元慶元年穀稼多損、調庸不備。二年夷虜反叛、國內騷擾。義從俘囚及諸郡田夷並渡嶋狄等、或被於敵戎、或慕化遠來。開用不動穀三千二百卅七斛五斗、以充大饗。不先言上、責在國宰、至是、勅免除。
14	日本紀略	寬平	5	5	1	15	893	出羽国渡嶋狄与奥地俘囚等依欲致戦闘之奏狀、仰国宰、令警固城塞、選練軍士。

*本文を2 A、分註を2 Bとする。

Review of Watarinoshima

OGUCHI Masashi

The region called “*Watarinoshima*” appears in the section of *Saimei* of the *Nihonshoki*. Many historians have debated on the precise location of *Watarinoshima*, as it is the crucial region for the formation of the centralized state and its international relation at that time.

Traditionally, *Watarinoshima* had been identified as Hokkaido. But it was later considered to be the part of the mainland according to the analysis of “*Mission of Hirafu*” in the *Nihonshoki* by an influential historian, TSUDA Soukichi.

Recent archaeological researches reveal that Hokkaido and the Japanese mainland had more active interaction than previously thought. Thus, the traditional theory that *Hirafu* might have been to Hokkaido seems plausible. The current prevailing view identifies *Watarinoshima* as Hokkaido.

Before the Medieval era, the northernmost part of the mainland had more close relationship with Hokkaido than the other parts of the mainland. The regions surrounding the Tsugaru Straits, which are the northern most mainland and the southern part of Hokkaido, formed a cultural sphere and it was different from the cultures in eastern or central Hokkaido. Thus, *Watarinoshima* might have been the area surrounding the Tsugaru Straits.

North to *Watarinoshima*, there was an area called *Mishihase*. It can be identified as eastern or central Hokkaido. Various chronicles are available for the folklore of *Mishihase* people, indicating that they had a complex and various cultural interaction with other groups.

The cultural area surrounding the Tsugaru Straits disintegrated in the tenth century and consequently the word of *Watarinoshima* disappeared in historical texts. After a couple of centuries, the cultural interaction between the northernmost mainland and the southern Hokkaido revived and *Watarinoshima* again flourished.